fate/extra night

凡々丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｆａｔｅ／ｅｘｔｒａ　ｎｉｇｈｔ

【Ｎコード】
Ｎ０５６６Ｏ

【作者名】
凡々丸

【あらすじ】
――そうして舞台の幕は下りた。
役者達は役を解かれ、後には静寂が残るだけ。
観客からの拍手はなく、ただひたすらに次の開幕を待つ。
それまでの、少しだけ長い幕間――。

ちょっとした設定集

○サーヴァント設定（ムーンセル聖杯戦争最終戦時）

セイバー

【クラス】セイバー

【性別】女性

【真名】ネロ・クラウディウス

【筋力】C　【耐久】C　【敏捷】C　【魔力】D　【幸運】C

【クラス別能力】対魔力：C

【保有スキル】頭痛持ち：B　皇帝特権：EX

【宝具】招き蕩う黄金劇場（アエストゥス・ドムス・アウレア）

アーチャー

【クラス】アーチャー

【性別】男性

【真名】無銘

【筋力】D　【耐久】C　【敏捷】C　【魔力】C　【幸運】D

【クラス別能力】対魔力：D　単独行動：C

【保有スキル】心眼（偽）：B

【宝具】無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）

キャスター

【クラス】キャスター

【性別】女性

【真名】玉藻の前

【筋力】D　【耐久】D　【敏捷】C　【魔力】C　【幸運】C

【クラス別能力】陣地作成：C

【保有スキル】呪術：EX　変化：A

【宝具】水天日光天照八野鎮石（すいてんにっこうあまてらすやのしずいし）

ちょっとした設定集（後書き）

ムーンセルでのトワイス戦時の、サーヴァントのステータスです。

プロローグ

――そうして舞台の幕は下りた。

役者達は役を解かれ、後には静寂が残るだけ。

観客からの拍手はなく、ただひたすらに次の開幕を待つ。

それまでの、少しだけ長い幕間――

◇

……どのくらい眠っていたのだろう。

誰かに呼ばれたような気がして、重い瞼を開く。

「――ここ、は――」

目覚めると白い天井と消毒液の匂い。ぼんやり頭でベッドから体を起こす。

そこは保健室だった。

すでに日は暮れているらしく、電気の点いていない室内は暗い。

「ようやく目が覚めたか？　また随分と遅い起床だったな、奏者よ」

――その声で、完全に意識がはっきりする。

目の前にはいつの間にか、真紅の衣に身を包んだ、男装の少女が立っている。

「何だ。そなたまだ寝ぼけているのか？　自分の名前は覚えておるか？」

無言でいた私を不審に思ったのか、不満気に少女が聞いてくる。

名前……私の、名前――。

「……まどか。芦家（あしか）、円（まどか）」

勿論覚えている。目の前にいる少女の事も。

「セイバー」

己が従者の名を口にする。熾烈な戦いを共に勝ち抜いた、私の剣――

「すでに開幕の刻は過ぎている。我らの聖杯戦争は始まっているぞ、マスター」

少女は満足気に頷き、自信に満ちた声で私を再び戦場へ誘った。

◇

――聖杯戦争。魔術師達が、一つしかない願いを叶える万能の聖杯を求めた争い。

元々は地上で行われた聖杯を呼ぶ儀式を指したそうだが、私達が参加した聖杯戦争は遥かな天上世界で行われた殺し合いだった。

月海原学園（つくみはらがくえん）という学校を舞台に、勝者が最後の一人になるまで殺し合うトーナメント戦。

予選では９９９人、本戦開始時には１２８人と減っていき、その最後の一人となったのが私だった。

暗い廊下

暗い校舎を歩く。人の気配がしない、前回の聖杯戦争の最後を思い出させる静けさ。

生きているのが、自分達だけになってしまったかのような世界。

それでもあの時は監督役が最後まで残っていたし、何より傍らには彼女達がいた。

「何とも殺風景で、華のない景観よな」

セイバーが不機嫌そうに言う。

装飾華美を愛する彼女としては、舞台が暗くて静かな夜の学校と言うのが不満なのだろう。

私の隣を歩く少女は人間ではない。いや、正確に言えばかつて人間であったものだ。

過去・未来・現在の時間を問わず、世界と契約して人の身で届かない偉業を成し遂げた英雄は、死後に世界を守る英霊となる。

聖杯戦争では彼らは聖杯に呼ばれ、魔術師（マスター）を守る従者（サーヴァント）という役割を与えられる。

サーヴァントはそれぞれ騎士（セイバー）・槍兵（ランサー）・弓兵（アーチャー）・騎兵（ライダー）・魔術師（キャスター）・暗殺（アサシン）

者・狂戦士（バーサーカー）といった聖杯の用意した器（クラス）に分けられ、こちらの世界に現界する。

この他にもイレギュラーなクラスで現界するサーヴァントもいるが、クラスごとに得意分野が違い、大抵は生前の有名な逸話などからそのクラスを決定される。

……まぁ、私のサーヴァントは少し違うようだけど……。

基本的にセイバー・ランサー・アーチャーのクラスは三騎士クラスと呼ばれ、高い性能を持っていると言われている。

中でもセイバーは最優のサーヴァントと呼ばれ、過去の聖杯戦争においても最後の戦いまで残っていたらしい。

……私のセイバーを見ていると疑問に思うけど……。

「――そなた、さっきから何を一人でブツブツ言っておるのだ？」

セイバーの訝しげな声で、思考の海から這い上がる。

「前回と同じく学舎のようだが、全く同じ場所というわけではないな。

他のマスターやサーヴァントの気配も感じぬし、ここ以外の場所での戦闘もありそうだ」

セイバーの言う通り、私達がいる場所は前回の戦場だった月海原学園ではない。

保健室でのセイバーとの会話を思い出す。

■

「周辺を探索しに行くぞ。余も召喚されたばかりで、状況が分からぬ」

目覚めのすぐ後に、妙にきっぱりとした口調で、私の頼りになるはずのサーヴァントは告げた。

「……分からぬって、聖杯戦争が始まったって言ったのは、セイバーだよね？」

「うむ。もちろん聖杯戦争が起きていることは分かるぞ。『サーヴァントを倒さなければならぬ』という衝動が湧いてくるからな」

得意気に返された。

「この地で行われた聖杯戦争はバトルロイヤルだったようだし、SE（セラフ）・RA・PHの時とは色々と違いもあろう。早めにルールの詳細も確認しておかねば、今後の戦闘に支障が出

るぞ」

……確かに。

見たところ保健室には状況説明をしてくれる、親切なナビゲーターはいない。

現状把握は自らの足でしなければならない、か。

聖杯戦争が始まったのならば、私のするべき事は勝つこと・生き残ることだ。

そこに迷いの入る余地などない。

■

「そう言えばサーヴァントって、その世界の知識とか持ってるんでしょ？」

歩きながらセイバーに問いかける。

サーヴァントはあらゆる時代に呼び出され、その時代に適応するための知識が聖杯から与えられていたはずだ。

「ここが何処かとか分からない？　ムーンセルの中じゃない事だけは分かるんだけど」

ここが地上だという事は、何となく分かっていた。

多くの魔術師が聖杯を求めて、肉体と共に置き捨てたモノ。

多くのマスターが帰る事を欲して、遂に帰る事のなかった大地。

彼女達が帰って行った場所だった。

――？　今、何か違和感があったような――

「――うむ。我らが参加した聖杯戦争があった時よりも何十年か過去の、日本の冬木市という場所だな。

季節は冬のようだ」

セイバーの返事で我に返る。日本と言えばあの黒髪の少女が話していた国だ。

戦いが終われば行ってみたいと彼女は言っていた。

もしかしたら彼女に会う事ができるかもしれな――ちょっと待て。

「セイバー、今何て言った？」

「……？　何十年か前の、冬木市という場所だ。何度も言わすでない」

……何十年前？　いきなり見知らぬ場所で目覚めて何十年も過去？

「ふむ、少し前にここでも聖杯戦争があったらしいな。
二百年間で五度に及ぶ戦いの末、結局勝者を出す事なく聖杯は破壊された――か。
うむ、良いぞ！　大規模で派手な浪費は余の好むところだ！」

よく分からないところでセイバーは頷いていた。

「……聖杯が壊れてたのなら、セイバーが呼び出された意味ないんじゃない？
勝っても賞品ないんでしょ」

「何を言うか！　聖杯戦争は聖杯があるからこそ起こるのだ。
この地の聖杯が破壊されていたとしても、聖杯戦争が起こっている以上、聖杯は必ず在る！」

セイバーの言葉はきっと正しい。サーヴァントならば聖杯の異常には敏感だろう。

――でも、私の望みは生き残る事だったはずだ。

聖杯がなければ戦いそのものに巻き込まれずに済む。

情けなくても、戦わずにすむならそれに越した事はないはずだ。

そんな事を考えながら再び歩き出し――

「――む？　待て、サーヴァントの気配だ！」

セイバーの警告で、頭が緊張を取り戻した。

「……屋上にいるな。敵も我らに気付いているようだ。
はじめよう、マスター！」

赤い剣士が戦いの始まりを告げ、思考が戦士のものに切り替わる。

マスター同士が出会ったなら、戦いを避けるという選択肢などない。

聖杯戦争の勝者は一人。自分達以外のマスターとサーヴァントは敵だ。

セイバーに先導させて、敵のいる場所を目指して走った。

月夜の屋上

「――えっ？」

屋上に足を踏み入れて、いきなり頭が真っ白になる。

そこにいたのは、少年と少女だった。多分、少年の方はマスターだろう。

少女の方は、白銀の鎧に青い衣装を身に纏った――

「……ふむ。こういう事もあるか」

セイバーが感心したように言った。

「前回のキャスターを思い出すな。
あの時は珍しい童女もいるものだと思っていたが、別段珍しくもなかったようだ」

少女は『彼女』の鏡像だった。鏡ごしに見る彼女。

「セイバー、アレって……」

「うむ。敵のサーヴァントだ」

セイバーのきっぱりとした口調に、私はようやく我に返る。

――私達を待っていた敵は、セイバーに生き写しだった。
流れる金髪、小柄といっていい体躯、暗い夜でも分かる白い肌。
赤と青の衣を身に纏った二人の『セイバー』が、月明かりの下で対峙していた。
敵マスターの口が動いた。コードキャストを使うつもりか――！
「奏者よ、指示を」
セイバーはすでに戦闘態勢に入り、私の合図を待っていた。
ならばマスターとして、言う事は一つだけだ。
「セイバー、私達の敵を倒して！」
「見てるがよい！」
解き放たれた赤き暴君が、青き騎士に向かって疾駆した――
神速の踏み込みで放ったセイバーの渾身の一撃を、青いサーヴァントは容易く弾く。
返す刀で防ぎに入ったセイバーを、防御の上から斬り飛ばした。

「クッッッ！」

体勢を崩されて立て直そうとするセイバーに、青いサーヴァントの烈火怒涛の追撃が迫る。

最初の一太刀を繰り出した後、セイバーは防戦一方になった。

「何て――デタラメ」

圧倒的な実力差。筋力・耐久・敏捷・魔力・幸運。

セイバーに酷似した敵は、容姿に似合わない、怪物じみた戦闘力を持っていた。

更に問題なのが、その武器だ。

手にした何かでセイバーを攻撃しているらしいのだが、その武器が見えない。

セイバーは相手の挙動を見て紙一重で防御に成功しているが、このままでは長くはもたないだろう。

……状況を打開する手段はただ一つ。私が持っている、この――

青いサーヴァントのマスターが、私に分からない言葉で何か呪文の詠唱をしている。

青いサーヴァントの強烈な一撃で、再び二体のサーヴァントの距

離が離れた。

――今だッ――！

「ｓｈｏｃｋ（６４）！」

サーヴァントが距離を詰める前に、私は敵にコードキャストを放つ。

マスターは身に着けている礼装によって、コードキャストという特殊効果をあげる呪文を使えるようになる。

今、私の身に着けている礼装の名は『破邪刀』。

コードキャストは、相手サーヴァントにダメージを与えて、スタンさせる効果がある。

セイバーに意識を集中している敵サーヴァントに、これをかわせるはずがない――！

「セイバーッッッ！」

私が呼びかけるより早くセイバーは青いサーヴァントの懐に飛び込むと、コードキャストで相手が怯んだ隙をつく渾身の一撃が――

「……嘘」

――入るより速く、敵の無慈悲な斬撃がセイバーを斬り伏せてい

た。

あの敵にとって、私のコードキャストなどかわせなかったのではなく、かわす必要がなかっただけ。

圧倒的な対魔力は、礼装の効果すらも無効化してしまった。

地に伏したセイバーは起き上がらない。逃れようのない死は、私にも近づいて来る。

青いサーヴァントのマスターの少年。彼は何か言いながら、私の方に近づいて来る。

もう何を言われていても聞き取れない。私はそのまま、意識を手放した。

◇

「決着はついたんだからもう戦う必要は……っておいッ、大丈夫かッ！」

芦家円（あしかまどか）は、自身のサーヴァントの敗北の衝撃に意識を失い――

冬の夜には、青いサーヴァントのマスターの少年・衛宮士郎（えみや しろう）の慌

てた声が響いた。

ステータス情報が更新されました

【クラス】セイバー
【マスター】芦家　円
【性別】女性
【真名】
【筋力】E　【耐久】E　【敏捷】E　【魔力】E　【幸運】E
【クラス別能力】対魔力：C
【保有スキル】頭痛持ち：B　皇帝特権：EX
【宝具】

月の影

衛宮士郎（えみや しろう）は困惑していた。目の前には横たわる二人の少女の姿がある。

一人は彼のサーヴァントに倒され、一人は倒れた少女を見て気絶してしまっていた。

……夜中に学校の屋上で何かしている自分達は、どう見ても場違いで不審者に見えただろう。

だが話しかけようとした自分達に、問答無用で襲いかかって来るのは、如何なものか――

「……っていうか怪しい奴が話しかけたから、斬りかかって来たんだな」

不用意に話しかけた事が、少女達を更に警戒させたのかもしれない。

「シロウ、この2人はどうしますか？」

戦闘を終えた彼のサーヴァント・セイバーが戻って来る。

彼女だからこそ、赤い服の少女を斬り伏せられたのだ。

……俺だったら十合も打ち合えずに殺されてたな、と士郎は思う。

「そうだな、このまま放っておくわけにもいかない。目を覚まさないようなら、一旦家に連れて帰ろう」

「……シロウ――」

セイバーは己の主に抗議の視線を向ける。

斬りかかって来た少女はサーヴァントだ。

人間離れした圧倒的な存在感と魔力は、間違いようがない。

気絶した少女はマスターだろう。二人とも聖杯戦争の参加者であり、実際に敵として襲われたのだ。

「戦う気になってるマスターに同情はするなって言いたいんだろ、セイバー。

俺だって、無関係な人を巻き込むようなマスターなら倒す事に躊躇しない。けど――」

この二人がどうだったのかは分からない、と彼女のマスターは続けた。

聖杯戦争の参加者ならば、自分以外のマスターやサーヴァントを見れば警戒もするだろう。

……彼らのように目立つ行動を取っていれば尚更に。

「……ではシロウは本当に、敵になるかもしれないマスターを衛宮邸に連れて行くのですか」

またか、とセイバーは溜め息をつく。

「うちには遠坂も桜もイリヤもライダーもいるし、アーチャーやバゼットだって呼べるだろ。もしこの子達が戦う気になっても、目の届くとこにいれば止められる」

セイバーの反応が不満だったのか、むっとした表情で士郎は主張する。

「ここで脱落して貰えば、見張る手間もかからないと思いますが」

主の主張は、従者の正論で一刀両断された。

「それに、この二人の事を大河にどう説明するのです？」

続けてセイバーは、士郎にとって聖杯戦争以上に頭の痛い問題を指摘した。

彼らの本拠地である衛宮邸の住人は、家主の士郎以外全員が女性である。

最近では女性マスターの駆け込み寺としても利用され、年頃の青少年を悩ませていた。

――この上で二人を連れて行くとなると、士郎は姉貴分に、本気で亡き義父の所に送られてしまうかもしれない。

「……セイバーのお姉さん達が日本に観光旅行に来た、とか」

ダメかな、と視線で問いかける士郎。

「……似たような言い訳を、私の時にもやっていましたね」

ダメだろ、と言葉の外で返すセイバー。

――セイバーが衛宮邸に来た時には、『士郎の父親の知人で遠い親戚』が日本に観光に来た、と紹介していた。

そのまま何だかんだとうやむやにしてしまい、現在に至っている。

……さすがに今度も同じ言い訳では、納得しないだろう。

「しかも、よりによって私の姉ですか」

セイバーの眉間に皺が寄っていた。セイバーの姉は、彼女の生前の天敵である。

虚ろな揺り籠

――時間を少し遡る。

冬木のサーヴァント達も、聖杯戦争が始まった事を感じ取っていた。

傍観する者もいれば、戦う気になった者もいる。

衛宮士郎（えみや しろう）とセイバーもまた、聖杯戦争に乗って戦いを始めた者がいないかを調べるべく、夜の巡回を再開していた。

町に目立った異常はなく、それが『始まった聖杯戦争』の異常だった。

聖杯戦争が始まっているのに、夜の町に異常がない事は有り得ない。

異常がないのは、自分達が異常を異常と認識できていないからだ。

多くの矛盾の中に、小さな真実が隠されてしまっていた。

「アヴェンジャーの時を思い出しますね」

白い息を吐きながら、セイバーが呟く。

彼女が言ったのは、第五次聖杯戦争が終わった半年後の秋に冬木市で起こった、『繰り返される四日間』という異常である。

第三次の聖杯戦争の脚本で再現された、四日間だけの第五次聖杯戦争。

アヴェンジャーのサーヴァントが廻していた、虚ろな世界。

その中では、第五次で倒されたマスターやサーヴァントも再現され、役割を変えて四日間を繰り返していた。

「む。それって、おかしくなってる事を、俺達がおかしいと思えなくなってるって事か？」

傍らを歩く士郎が問う。

言葉に出して確認する事で、おかしくなっている部分を見つけられるように。

「ええ。明らかに矛盾している事実であっても、私達はそれが当然であると認識してしまい、異常自体に気付けない。

……今回の聖杯戦争はその類だと思います」

言いながらセイバーは目を伏せた。小さな矛盾はすぐに目につく。

――それは例えば、彼女が未だ現界しており、士郎のサーヴァントのままである事だったり――

セイバーが第五次聖杯戦争の後も現界し続けているならば、彼女のマスターは遠坂（とおさか）凛でなければならない。

それ以外の可能性がないからだ。世界は矛盾を嫌う。

士郎が矛盾に気付いてしまえば修正されて、セイバーがいない世界か、遠坂凛がセイバーのマスターである世界になるだろう。

『繰り返される四日間』でもセイバーは士郎のサーヴァントとして現界していたが、その矛盾を誰も口にしなかった。

可能性（きづかない）がある限りは内包するが、可能性（きづいてしまえば）がなくなれば、世界は決して矛盾を許さない。

二人が話している内に、穂群原学園に着いた。校庭の外から学校を見渡す。

「パッと見た感じ、特に異常はないな」

「そうですね。もし校舎内にサーヴァントがいるなら、気配を感じ取れま――ッッ！」

セイバーは言いかけた言葉を途中で切り、目を見開く。

どうした、と士郎が言いかけた瞬間、光って見えるほど強力な魔力が奔った。

「シロウ、サーヴァントの気配です！」

「ああ。行くぞ、セイバー！」

校門を乗り越え、一気に校庭を突っ切る。魔力の源は屋上にある。

「セイバーッ！　このまま――」

言いかけた言葉を切る士郎。

校舎に辿り着いた瞬間、現れた時と同じく、唐突に魔力が消えたのだ。

交錯

二人が屋上に着いた時には、すでにサーヴァントの姿はなく、かすかな魔力の残り香だけがあった。

「……この場にはいないようです」

周囲を見回して、セイバーが言う。無人の屋上を目にしても、警戒を緩めていない。

「柳洞寺のキャスターのように空間転移のできるサーヴァントでなければ、そう遠くには行ってないと思います。

隠れて様子を窺っているのかもしれない。私のそばから離れないで下さい、マスター」

「ああ、分かってる」

衛宮士郎（えみや しろう）は短く答える。

――サーヴァントは他のサーヴァントの気配を感じ取る事ができるが、例外も存在する。

最も顕著な例は、アサシンのサーヴァントのスキル『気配遮断』である。

第五次聖杯戦争の中盤以降に参加した黒い暗殺者は、サーヴァントにも見破られずに衛宮邸の結界を突破してみせた。

サーヴァントの戦闘での強弱だけでは、聖杯戦争には勝ち残れない。

戦力の劣るサーヴァントは、正面から向かって来るより敵マスターを狙う。

最優のサーヴァント・セイバーが最も警戒する事は、マスターを狙われる事だった。

「教室を一つ一つ見て回るぞ、セイバー」

中に入ろうと、入口に足を向けかけて――

「――！　待ってください、シロウ。サーヴァントが居ました」

――士郎の足が止まった。

セイバーは屋上の地面を睨んでいる。

直感はコンクリートを貫通し、下に居るであろう標的を捉えていた。

「向こうもこちらに気付いているようです。ここに向かって来ています」

どうするのだ、とセイバーは視線を士郎に向ける。

「ここで待とう。戦闘になるようなら迎え撃つ」

言い終えると士郎は口を噤み、屋上の扉を凝視した。

屋上は静かな凪に入り、やがて訪れる嵐を待つ。

――そうして扉が開かれる。

「――えっ？」

「なッ？」

同時に二人の『マスター』から驚きの声が上がる。

「……ふむ。こういう事もあるか」

赤い服の『セイバー』が感心したように頷き、青い服の『セイバー』は油断なく来訪者を見つめる。

「セイバーが、もう一人？」

士郎は呆然とした声で呟く。

脳裏に浮かんだのは、黒く染まった――

「違います、シロウ。どこの英霊かまでは分かりませんが、あれは私ではありません」

青き従者の言葉で、士郎は我に返った。

赤いサーヴァントは、独創的なデザインの剣を構え、戦闘態勢に入っていた。

マスターであろう学生服の少女は、ぼんやりとセイバーを見つめながら従者と話をしている。

「マスター、命令を。あの敵は、この場で倒します」

セイバーは不可視の剣を構え、跳びかかるために、脚に力を溜めている。

「待てセイバー、まだ戦うと決まったわけじゃな――」

「セイバー、私達の敵を倒して！」

慌てて制止する士郎の声をかき消して、学生服のマスターの声が従者達に届く。

「見てるがよい！」

赤き暴君が走る。

「退がってください、マスターッ！」

青き騎士王が迎え撃つ。

赤と青のサーヴァントが、互いの虚像を砕かんと剣を振り下ろした――

月夜の終わりに

「……。――――？」

「――――！　――――！」

声が聞える。誰かが言い争っているような声が――

「――ええい、だから敵の手など借りぬと言っておる！
何を企んでいたか知らぬが、早々に立ち去れ！」

「襲いかかって来たのはそちらでしょう！　何という言い草ですか！」

「だから二人とも落ち着けってば！」

頭がはっきりしない。何を言い争っているのか――

「どこの誰とも分からん敵の城になど、奏者を連れて行けるか！
たった今、奏者の命を狙ったばかりではないか！」

「人の話を聴いていたのですか、貴女は！
シロウ、やはりこのような輩を衛宮邸に連れて行く必要はありません！
望み通り、この場で脱落させてあげましょう！」

「落ち着けセイバー！
……アンタが俺達を警戒する気持ちは分かるけど、このまま屋上にいたんじゃこの子、風邪ひいちまうだろ」

――命。狙われて、脱落……

「保健室ならベッドがあったはずだ。
それにそなた達の手など借りずとも、奏者は余が守る！」

「たった今、私に倒されかけたばかりではないですか！」

「アンタのマスターも気絶したままだろ。
二人とも本調子になるまで、うちで養生したほうがいい」

倒され、た――？

「セイバーッッッ！」

跳ね起きる。完全に意識が覚醒した。

「っと、目が覚めたかマスター！
赤毛に青いの、そういうわけだから、我らはそなた達の城になど行かぬ！」

セイバーが駆け寄って来る。

後半は私ではなく、青いサーヴァントとそのマスターに言ったらしい。

……私が気絶している間に、何か仲良くなってないか？

「セイバー、怪我は――」

「保健室に戻るぞ。怪我がなくとも、本調子ではなかろう」

セイバーは有無を言わさず、私を引っ張って行こうとする。

今の状況がさっぱり分からない。

「待てって！　女の子二人だけじゃ危ない。襲われたらどうするんだ」

相手のマスターであろう、赤銅色の髪の少年が追いかけて来る。

……こんな時に何だが、まともに女の子扱いされたのは、前回の聖杯戦争から通しても初めてかもしれない。

「……そなた、何を嬉しそうにしておるのだ」

心の声は表情に出ていたらしい。

セイバーは私を引っ張っていた手を離し、不機嫌そうに少年を指差した。

「あの小僧は敵だぞ、敵。いやむしろ、羊の皮を被った何かだ。

油断してると、奏者もぱっくりやられるぞ」

「訂正しなさい！　マスターへの侮辱は許しません！　シロウは紳士です！」

向こうのサーヴァントは激昂している。

少年も居心地悪そうな顔をしながら、私の方に向き直る。

「……サーヴァントの話じゃ、ほとんど何も分からないまま、聖杯戦争に参加する事になったんだろ？

俺には詳しい説明はできないけど、聖杯戦争に詳しい知り合いがいる。

情報収集も兼ねて、アンタのサーヴァントが回復するまで、うちに来ないか？」

私が気絶している間に、セイバーが色々と話したのだろう。

それにしても、ついさっき殺し合いをした相手である。

「どうなってるの？」

傍らのセイバーに問いかける。

「ふん、我らと手を結びたいと言う事だろう。

――うむ。余と奏者の実力を見抜いている事だけは、称賛に値するな」

胸を張って答えるセイバー。ものすごく曲解してるように聞こえるのは気のせいか？

……ともかく少年の方に向き直る。

「どうして私達を助けてくれるんです？」

セイバーは青いサーヴァントに完全に負けた。

なのに私もセイバーもこうして生きていて、敵マスターは自分達に助力してくれると言う。

現状が分からな過ぎる。

「だってアンタ達、困ってたんだろ？」

なのに更に分からない事を言われた。

――確か聖杯戦争のルールって、自分以外のマスターとサーヴァントを全員倒して聖杯を手に入れる事……だったよな？

ステータス情報が更新されました

【クラス】セイバー
【マスター】衛宮　士郎
【性別】女性
【真名】
【筋力】Ｂ　【耐久】Ｃ　【敏捷】Ｃ　【魔力】Ｂ　【幸運】Ｂ
【クラス別能力】対魔力：Ａ　騎乗：Ｂ

【保有スキル】直感：A　魔力放出：A　カリスマ：B

【宝具】

家に帰る道

「――じゃあ、芦家は別の聖杯戦争のマスターだったのか？」

並んで歩きながら、敵のマスター・衛宮士郎（えみや しろう）は尋ねて来た。

「そうだよ。私とセイバーが参加した聖杯戦争は、冬木市の聖杯戦争じゃない。

遠い別の場所の聖杯戦争」

微妙にはぐらかして答える。

さすがに未来から来たとか、月が戦場だったとか言いづらい。

この時代の人間がムーンセルを知っているはずがないし、一般人が単独で月まで行くなどできなかったと思う。

「私達はその聖杯戦争で最後まで残って、聖杯の力でこっちに戻って来たんだ」

自分で言って、何か違和感を感じる。まだ本調子には戻っていないらしい。

結局、私は衛宮士郎の申し出を受ける事にした。

士郎達の本拠地にはマスターやサーヴァントが集まっているという話だが、私達を今倒す気なら、彼らだけで十分なはずだ。

少なくとも、仲間の所に連れて行って私達を袋叩きにしよう、という意図はない。

敵の情報もきっと集められるだろうし、何より敵に知られていると分かっている場所で一夜を過ごすほど、私の神経は太くない。

安全に傷を癒せる場所は、素直にありがたかった。

……まぁそのせいで、士郎の家に行く事に反対していたセイバーはむくれて霊体化してしまい、さっきから私が話しかけてもロクに答えてくれないが。

「聖杯戦争ってそんなにあるのか。聖杯が一つじゃないってのは聞いた事あるけど」

士郎の口調に苦いものが交ざる。

彼も聖杯を欲する魔術師のはずだが、何となく士郎は聖杯を嫌悪しているのではないか、と思った。

「……聖杯は万能の願望機だから、色んな人が欲しがるじゃない。願いを叶えられるのが一人なら、どこでも争いになるんじゃないかな」

少なくとも、私の経験した聖杯戦争はそうだった。

色んな願いを持った人達が集まり、一つの『万能の器』を求めて争った。

――共に闘った赤い弓兵も、何度か別の聖杯戦争の事を口にしていた。

彼は今でもどこか別の世界で、サーヴァントとして闘っているのだろうか。

「聖杯戦争という名前かは分かりませんが、聖杯を巡る争いは、様々な時代や場所で起こっています」

士郎のサーヴァントが言う。彼女のクラスもセイバーらしい。

容姿だけでなく、クラスまで同じである。

……案外正体はセイバーのお母さんとか、因縁の深い相手ではあるまいか。

（それはないぞ、マスター）

それまでだんまりを決め込んでいたセイバーが、私だけに聞こえる声で言う。

（この青いのがどこの英霊かは知らぬが、そこまで深い因縁のある相手ならば、少なくともどちらかは気付く。
私(わたし)はあやつに見覚えがないし、向こうもそんな感じであろう？）

セイバーが一人称を変えている。

彼女個人と関係のない英霊だと言う事を強調したいらしい。

……この二人、あまり相性は良くなさそうだ。

「ところで士郎、私からも聞きたい事があるんだけど」

身の上話を切り上げて、私は今一番の問題に入る。

「ここのアリーナがどこにあるか教えてくれない？　できれば早めに入りたいんだ」

さっきの戦いで分かった事だが、セイバーは霊格が完全には戻っていない。

それどころか全ての能力値が、ムーンセルでの聖杯戦争開始時と同じ位まで下がってしまっているのだ。

士郎のセイバーは確かに強敵だが、決勝戦の相手だったセイバーのサーヴァントはもっと強かった。

さっきの戦いもセイバーの霊格が完全ならば、あそこまでボロ負けする事はなかったはずだ。

早めにアリーナで力をつけて、セイバーの霊格を取り戻さなければならない。

「む？　アリーナって何さ？」

と、士郎が変な事を聞き返してきた。

……はて、この聖杯戦争では言い方が違うのか？

「マスターとサーヴァントが決戦まで訓練できる所だよ。士郎だって、ぶっつけ本番で本戦に出てたわけじゃないでしょ？」

何故か士郎が考え込むような顔をしている。別に特別なこと言ってないよな？

「あー、道場とかなら家にあるぞ。剣の訓練とかならできると思う」

士郎がまた変な事を言ってくる。

……道場で剣の訓練って、相手どうするんだ。私がするのか？

「そういうのじゃなくて、迷宮（ダンジョン）で敵（エネミー）を倒したり、暗号鍵（トリガー）を揃えたり」

また士郎が難しい顔をしている。

何かさっきから会話が微妙にかみ合ってなくないか？

「……あのさ。何か聞きにくいんだけど」

向こうもそう思ったのか、少し慎重に切り出してくる。

「ダンジョンとかトリガーって何さ？」

「何さって……集めるでしょ、暗号鍵（トリガー）？　監督役に集めるように言われたでしょ？」

マスターは、決戦に出るために相応しい力量を持つ事を証明しなければならない。

二つの暗号鍵（トリガー）を集める事は、決戦の前の試練（タスク）である。

これがないと決戦場に入る事すらできなかったはずだ。

「いや、言われないぞ」

……何だって？

「暗号鍵（トリガー）なくても、不戦敗にならなかったの？

決戦場の入り口あたりで、『期間内に暗号鍵（トリガー）を揃えられなかった者に、この先に行く資格はない』とか言われなかった？」

あの、明らかにボスキャラとしか思えない神父に。

「いや、決戦場所とか監督役が決めるものじゃないだろ」

――あれ？

（うむ。やはり我らの知る聖杯戦争とはルールが違うようだな、奏者よ）

ようやく少し機嫌を直したらしいセイバーが、私にしか聞こえない声で言う。

「……えーっと、その、士郎？」

怪訝な顔をしている士郎に、今更ながらルール説明を頼む。

――初っ端からこれで大丈夫か私。

残月

衛宮士郎（えみや しろう）・芦家円達（あしかまどか）が帰路につき、穂群原学園は再び静寂を取り戻す。

校舎に人影はなく、日が登るまで穏やかな刻が流れる――

その筈だった。

「ひゃあぁ、危ない所でしたね～。
セイバーが近くにいなかったら、戦いになってる所でした」

無音の闇を陽気な声が破る。

無人のはずの教室の扉が開き、一人の少女が廊下に出て来る。

「召喚されていきなり、あんな強いのとニアミスするとは！
あの青いの、マスター弱っちそーだったクセに、セイバー倒すとかチートすぎです！」

少女は頭を振りながら喋り続けている。

ピンクの髪についた大きな青いリボンが揺れ、狐を連想させる耳がピコピコ動く。

「あの青いのとガチンコしようと思ったら、マスター抜きではさすがに厳しいですね。
……まぁ、円さんって言うマスターがいたクセに、あっさりやられた赤いのは論外ですけど」

狐耳の少女はこの場にいないライバルをこきおろしながら、むむむっと先の戦いに思いを巡らせる。

■

――衛宮士郎と青い騎士王が穂群原学園に着いて最初に感じた魔力は、彼女のものである。

召喚されて校舎の屋上に降り立った瞬間、彼女は強敵の接近に気付いた。

（やばッ、デンジャー警報感知！　耳にピンときました！）

刹那の思考で不利を悟り、身を隠す事を選択する。

屋上から走り出て、自身の魔力をジャミングし、空いている一室に滑り込んだ。

（那須野の決戦を思い出すこの空気……要注意です！）

敵は階段を駆け上がり、彼女が召喚された屋上へと向かっている。

魔力は強大、召喚直後の肩慣らしの相手にしては荷が勝ちすぎる。

対決するなら万全な状態で、戦力を見定めてからにしたい。

（何とかこのまま別れたい所ですが、一度気付かれたからには難しいかな）

屋上に向かった敵は、すぐにでもここも探しに来るだろう。

アサシンのサーヴァントでもない限り、見つからずにやり過ごすのは困難だ。

（やっぱ一戦、交えなきゃならないですかね）

自分ひとりならばそれでも良い。　この身は神の一側面。

八万の軍勢が来ようと恐れはしない。

だが、今は――

「あっ」

唐突に気付いた。

屋上に向かった敵の印象が強すぎて今まで見落としていたが、下の階にもう一体、サーヴァントの気配がある。

「……前門の虎、後門の狼というワケですか」

下にいるサーヴァントは、階段を上ってこちらに向かって来ている。

屋上にいるサーヴァントの仲間かもしれない。

（来るなら来やがれ、です）

腹を決めた。

屋上にいるサーヴァントより、下から来るサーヴァントの方がやりやすいだろう。

己の武器を取り出す。気配はすぐそこまで来ている。

教室の扉が開いた瞬間、キツイのをくれてやろうと身構えて――

「って、アレ？」

――気配は彼女達が隠れている教室の前を通り過ぎ、屋上へと向かって行った。

■

「で、今に至ると」

少女はごちる。結果として少女は、二体のサーヴァントの戦力を

測る事ができた。

「結局セイバーも青いのも、私達に気付かず行っちゃったんですよね。

……まぁ、助かりましたけど」

赤いセイバーの弱体化を見て、少女は初めて自身の能力の低下に気付いた。

あのまま戦っていたら、おそらくセイバーの二の舞になっていただろう。

「乙女がか弱いのは、それはそれでプラスです。

こう、『守ってあげたい！』って気分になれる、と言いますか……」

言いながら再び教室に入る。

教室の中央には、いくつかの机がくっついて並んでおり、その上で誰かが横になっている。

「もちろん、決戦では他のサーヴァントになんか負けませんよ。

愛の力を思い知らせてあげちゃいます」

少女は机に近づいて行く。

横になっている少年の目は固く閉じられ、一向に目覚める気配がない。

「セイバーにもあの青いのにも、私達なら負けません。

今日の所は退いてあげましたが、戦う時が来たら、酷い目に会わせてやりましょう！」

少女の声のトーンが変わる。

陽気に毒を交ぜながら話していた声に、優しさの色が混ざる。

「……だから、早く起きてくださいね、ご主人様（マスター）。
また、ふたり一緒にお出掛けしましょう」

慈しむように、眠っている少年に声をかける。夜明けはまだ遠い

――

ステータス情報が更新されました

【クラス】キャスター
【マスター】
【性別】女性
【真名】
【筋力】Ｅ　【耐久】Ｅ　【敏捷】Ｅ　【魔力】Ｅ　【幸運】Ｅ
【クラス別能力】陣地作成：Ｃ
【保有スキル】呪術：ＥＸ　変化：Ａ
【宝具】

残月（後書き）

導入部・完です

interlude　王と暗殺者

衛宮士郎（えみや しろう）や芦家円達（あしかまどか）が衛宮邸に向かっている頃、一つの戦いが終わりを告げていた。

「ハニー！　逃げッ、がッッ――」

「きゃあぁぁぁ～！　ダーリ～ンッッッ！」

絹を裂くような女の悲鳴が、闇夜の街に響き渡る。

すでに二体のサーヴァントが倒され、男もまた倒れた。

「いやあぁぁぁッッ！　起きてッ、ねぇ！　起きてよ、ダーリンッッッ！」

女は物言わぬ人形となった男にすがる。

この場で息のある者は二人。彼女と黒いコートの襲撃者のみ。

彼女は、次が自分の番である事を理解していた。

「つまらんな、ユリウスよ」

どこからか吐き捨てるような声がした。

「……」

ユリウスと呼ばれた殺人鬼は、沈黙を以って声に応える。

黒いコートの殺し屋は、『殺し』に愉快さを求める必要を感じていない。

半狂乱になった女の絶叫が、夜の静寂を乱している。

「黙らせろ、アサシン」

黒いコートの暗殺者の短い命令で、女の声が止む。

彼女は愛しき男との、永遠に続く死（デート）へと旅立ったのだ。

辺りに人影はなく、黒いコートの死神の姿だけがあった。

「現界してすでに十日、まともな相手に会った試しがない。このままでは、我が拳も錆びついてしまうぞ」

姿なき声がぼやく。

霊体化しているワケではないらしいが、声の主を見つける事はできない。

黒いコートの男、ユリウス・ベルキスク・ハーウェイは、黙ったまま踵を返す。

すでにこの場に用はない。正体不明の声のぼやきは続く。

「また前回の『剣の英霊』や『刀工の英霊』、『妖術の英霊』のよ

うな強き者達に会いたいものよ。
たった一打で死に至るような、弱者の相手はもういい」
「その願いはきっと叶いますよ、アサシン」
穏やかな声がし、ユリウスの足が止まる。
コツコツと響く二つの足音が、第三者の来訪を告げる。
「……レオ。いらしていたのですか」
「ええ。こんばんは、兄さん。ずいぶん精力的に動かれているようですね」
現れたのは、十代後半くらいの少年。
金色の髪と翠の瞳に、人を惹きつける容姿を持った『王』だった。
「……ハーウェイの次期当主が、このような場所に足を運ぶ必要はないと思われます。
貴方の目に適うマスターなど、ほとんどいないのですから」
「今回は前回とはルールが違うようなので、僕も待っているだけじゃなくて、積極的に動いて行こうと思うんです。
その方が、待ち人に早く会えるでしょう？」
レオと呼ばれた少年は楽しそうに笑う。
夜でも分かる白い肌は、高揚しているのか、少し赤くなっている。

「貴方もそう思いませんか、ガウェイン？」

自らの後方に向かって、レオは問いかける。

レオの半歩後ろには、白銀の鎧に身を固めた騎士が立っていた。

「私の方からは何も。私は主の王道を遮る敵が現れた時、貴方の剣として戦うだけです。

レオ」

淀みなく白騎士は答える。レオは少しだけ不満そうな顔をし、ユリウスに向き直る。

「円さんもタチエさんも、きっとこの聖杯戦争に呼ばれています。

遠からず出会う事になるでしょう」

「……あの二人が参加しているとしても、今回も勝ち残るとは限らないでしょう。

前回の勝者は他のマスター達に優先的に狙われるでしょうし、冬木市のマスター達も動いています」

ユリウスの返答に、レオは微笑みを返す。

「前回の聖杯戦争で、彼らが勝ち残るなんて思いませんでした。

最初に会った時は、本当にただ流されるだけの人達だと思っていました。

それが決勝まで勝ち進み、今までにない強敵として、僕に敗北を教えた――」

ムーンセルの聖杯戦争での敗北。

少年にとってもハーウェイにとっても、屈辱的なはずの思い出。

それでも彼は幸福そうに語る。

「きっと今回も、僕達の前に現れます。前回の聖杯戦争よりもさらに強力になって」

少年王、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイは、それまで敗北を知らなかった。

挫折する事もなく、ただ王道を歩むだけだった。

自分が完全な王である事を、疑う必要すらなかった。

それ故、成長する必要すらなかったのだ――

「兄さん。僕は今度こそ、彼らに勝ちたい。勝って、今度こそ本当の王になりたい。

今は、それだけを思っています」

敗北は苦いものだったが、少年にとって何より必要なものだった。

挫折を知って初めて、少年は成長する事を許されたのだ。

「……」

ユリウスは黙って異母弟を見つめる。

何の感情も浮かんでいなかった瞳に、かすかな感情が浮かぶ。

「レオ、そろそろ戻りましょう。休息も重要な事です。王に代わりはいないのですから」

「ありがとう、ガウェイン。それでは兄さん、また後日お会いしましょう」

レオと白騎士は去って行く。ユリウスは黙って二人を見送った。

「おぬしの異母弟は、変わったな」

それまで会話に加わらなかった、姿なき声が言う。

ユリウスは答えず、レオが言った二人のマスターに思いを巡らす。

「……芦家、中山」

彼らの宿敵達の名を呟く。

この殺人鬼には珍しく、冷たい殺意の中に、歓喜が交じっていた。

ステータス情報が更新されました

【クラス】セイバー

【マスター】レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ
【性別】男性
【真名】ガウェイン
【筋力】Ｂ＋　【耐久】Ｂ＋　【敏捷】Ｂ＋　【魔力】Ａ　【幸運】Ａ
【クラス別能力】対魔力：Ｂ　騎乗：Ｂ
【保有スキル】聖者の数字：ＥＸ
【宝具】

就寝前

「じゃあ、この部屋を使ってくれ」

衛宮士郎（えみや しろう）に案内された部屋は、和室だった。

ムーンセルの聖杯戦争で用意されていた個室（マイルーム）より、何倍も良いと思う。

「何かあったら、俺かセイバーに言ってくれ。さっきの部屋にいるから」

言って士郎は踵を返した。夜も遅いし、彼も早く眠りたいだろう。

「ありがとう、士郎。おやすみ」

「おう、おやすみ」

襖が閉められて、士郎が立ち去って行く音が聞える。

「……まったく。そなた、あの士郎とかいう小僧に気を許し過ぎだぞ！

敵の本拠地の真っただ中で、寝込みでも襲われたらどうするのだ！」

士郎が立ち去るなり、セイバーは実体化して不満をぶちまける。

ここまでの道中で大分機嫌も直ったと思っていたが、どうやら気のせいだったらしい。

「士郎が今戦う気だったなら、屋上で決着はついてた。
寝込みを襲うなんて、する必要ないじゃない」

それに冬の寒空で何か出てきそうな無人の学校より、人が住んでる温かみがある畳の部屋のほうが、私にはありがたい。

「……奏者よ、まさか忘れてはおるまいな？　我らと奴らは敵同士だという事を」

ジト目でセイバーが尋ねて来る。根はかなり深いようだ。

……どういうワケか、セイバーはずいぶん士郎に対抗意識を燃やしているらしい。

実際の所、私もそこまで士郎を信用しているワケではない。

というより、マスター同士ならそれは有り得てはいけないと思う。

――前回の聖杯戦争の、準決勝の相手を思い出す。

「今はセイバーの傷を治す事が大事。
いずれ敵になるって分かっててても、セイバーが回復できるなら、少しの間手を組む」

マスター同士が共同戦線を張る事はある。

利用し利用されるのは、聖杯戦争において正しい信頼関係だ。

戦う刻が来れば、相手が誰であっても全力で戦う。

そして、勝者は敗者の願いを踏みにじった分、絶対に勝ち続けなければならないのだ。

「私が本当に信じてるのは、セイバーだけだよ」

士郎とも同じ。今は休む所を提供して貰ったし、情報を交換し合って協力できる。

だが、戦いの刻が来れば――

「士郎とも、最後には戦う。戦って、必ず勝つ」

「……そうか、ならば良い。うむ、そなたの言う通りだ！
士郎とかいう奴の事は気にするな。そなたは、自身と私(わたし)を信じていれば良い」

なぜか機嫌が直ったらしく、セイバーが同意してくれる。

……士郎の事を気にしてたのはセイバーだと思う、とか突っ込んではいけないだろうか。

「けど、参ったな。士郎の説明だと、私達ってすごく不利じゃない？」

セイバーと二人きりになれたので、本題に入る。

ここに来るまでの道中、士郎から冬木市の聖杯戦争についての簡単な説明を受けた。

その結果、もともと深刻な事態だったのが、実はさらに深刻な事態だった事に気付いたのだ。

おやすみ

――ムーンセルの聖杯戦争の本戦では、最初に対戦相手が決められた。

対戦相手が決まると、マスターは猶予期間（モラトリアム）という六日間の準備期間に入り、決戦に向けて準備をするのだ。

この期間内に対戦相手の情報を集め、アリーナに入って力をつける。

アリーナは迷宮（ダンジョン）になっており、敵性（エネミー）プログラムと言う仮想敵を相手に鍛錬をする事ができた。

二つの暗号鍵（トリガーキー）も、この期間内に集める事になる。

猶予期間（モラトリアム）が終わると、いよいよ決戦。

サーヴァント同士の一騎打ちで決着をつける。

勝利したマスターとサーヴァントは、次の戦いに駒を進める。

敗北するとサーヴァントは消えて、マスターには電脳死という最期が待っている。

これを最後の一組になるまで繰り返したトーナメント戦が、私達の前回の戦いだった。

「セイバーが最初に言ってた、冬木市の聖杯戦争がバトルロイヤルだって、こういう事か」

衛宮士郎(えみやしろう)から聞いた冬木市の聖杯戦争は、ムーンセルよりシンプルだった。

七組のマスターとサーヴァントによる戦い。

対戦相手も決められないし、決戦の準備のための猶予期間(モラトリアム)などもない。

アリーナのように鍛錬をする場所もないし、決まった決戦場所もない。

もちろん暗号鍵(トリガー)を集める必要もない。

つまり、いつでも・どこでも・どの相手とでも戦いが始まるという事だろう。

「言いかえれば、いつ・どこで・だれが襲って来てもおかしくない状態って事だ」

そして、戦いが始まる前に、準備できる時間や場所が確保されているワケではない。

ムーンセルの聖杯戦争でも、決戦の時以外で襲われた事はある。

アリーナで鉢合わせした時に攻撃されるのはもちろん、酷い時は

月海原学園内で奇襲をかけられた。

よく分からない場所に連れ込まれて、襲われた事もある。

それでも、基本的に学校では戦闘禁止だったし、アリーナでも短時間で強制的に戦闘を終了させられていた。

個室（マイルーム）も用意され、決戦まで最低限の安全は保障されていた。

今回はどうも、それがないらしい。

「どこにも安全地帯はないって事か」

例えばこの衛宮邸だって、安全というワケではないだろう。

「そう悪い事ばかりでもあるまい。

対戦相手がはっきり決まっていないのなら、一時的に他のマスターと手を組みやすいだろう。

決戦の日が決まっていないのなら、我らの方からいつでも仕掛けていけるではないか」

セイバーが励ますように言う。よほど私は頼りない顔をしていたらしい。

「そうだね。悪い事ばかりじゃない」

例えば対戦相手が決まった時点で、『絶対に自分か相手の死を覚悟しなきゃならない』というワケではない。

そういう意味では、少しだけ気が楽かもしれない。

「問題はこっちか……」

思わず溜め息が出る。こちらの問題は、私達だけでは解決できない。

今現在、セイバーは本来の力が出せていない。

これは、マスターである私の力量に合わせられているためだ。

実力の高いマスターならばサーヴァントも本来の力を発揮できるが、私のように実力のないマスターのサーヴァントは大幅にその力を制限される。

アリーナで鍛錬をするのは、マスターの力量を少しでも上げるためだ。

――『魂の改竄』という方法がある。

マスターの力量が低くてサーヴァントの実力が完全に発揮できない場合、マスターはサーヴァントとの魂の連結（リンク）を強化して、失われた力を復元するのだ。

実力のないマスターはアリーナで力をつけ、『魂の改竄』によってサーヴァントの力を復元する。

前回私が勝ち残れたのも、『魂の改竄』によってセイバーの霊格を完全に戻せたためだ。

「それができないなんて……」

ムーンセルの聖杯戦争では、教会にいた姉妹が『魂の改竄』をやってくれていた。

士郎は、教会はあるが『魂の改竄』については知らないと言った。

それはつまり、『魂の改竄』を行える者がいないと言う事だろう。

セイバーは今の最弱の能力のまま、最後まで戦っていかなければならない。

「それについては、これから二人で考えていこう。

今宵は、もう休むべきだ。休息も大切な事だぞ」

セイバーの言葉は正しい。今日は色々あって、すごく疲れた。

畳には二組の布団が、きちんと並べられている。

「奏者よ、おやすみ。麗しき夢を見るがよい」

「うん。おやすみ、セイバー」

布団にもぐり込むと、すぐに睡魔はやってきた。

今日はここまで、続きはまた明日から――

interlude　褐色の少女と赤い少女（前）

日付はすでに変わっている。

人影がなくなり静かになった筈の夜の新都に、二つの異分子の影がある。

「……脱落したのは二人、男性と女性。
ハーウェイ家の黒い蠍と、そのサーヴァントによって倒された。
レオ・ハーウェイもこの場に来ていたようですね」

何もない地面を見ながら、少女は呟く。相づちを求めたわけではない。

そもそも、もう一人との会話など最初から成立しない。

「倒されたのは、私の探し人ではない。
しかし、ユリウスやレオナルドの狙いも、あの二人に違いありません」

一人で呟き続ける少女の褐色の肌は、夜の闇に溶け込んで塗り潰されたように黒い。

傍らに立つ中華風の巨人は、無言で彼女を見守っている。

「黒い蠍は活発に動き回っている。私の星達は、大丈夫なのでしょうか……」

褐色の肌の少女はごち、その場から立ち去ろうとする。

「そこまでよ。動かないで」

真冬の夜の冷気よりも、更に冷たい別の少女の声。褐色の少女の足が止まった。

「こんばんは、名前も知らないマスターさん。
また、随分と派手にやってくれてるみたいね」

褐色の少女は振り返る。視線の先には二つの人影。

一人は長い黒髪を二つに結わえた、意志の強そうな瞳を持った少女。

一人は短い白い髪に浅黒い肌、外套の上からでもその筋肉質な身体が想像できるような屈強な体格の男性。

赤い衣装に身を包んだ二人は、どちらも腕組みしながら褐色の少女を睨みつけていた。

「貴方は――」

褐色の肌の少女の目が見開かれる。

その紫色の瞳の見つめる先は、声をかけてきた少女ではなく、赤い男性の方だった。

「アーチャー？　何故、貴方が遠坂凛（とおさかりん）と一緒に――」

「何、アンタの知り合いなの？　アーチャー」

怪訝そうに己の従者に振り返る赤い少女。赤いサーヴァントは肩をすくめる。

「――さて、私は会った事がないはずだが。君の知り合いではないのか、凛」

名前を呼ばれたのは君だろう、と皮肉げに続ける赤い弓兵。

凛と呼ばれた少女は、むぅと唸る。

敵マスターはどう見ても赤い弓兵に言っているのだが、彼女のサーヴァントは我関せずを決め込むつもりらしい。

「……まぁ、いいわ。後でちゃんと聞かせてもらうから。

で、そこの貴女。

わたし達の事を知ってるって事は、貴女はこの聖杯戦争の参加者だって思っていいのかしら？」

気を取り直して話を進める赤い少女。

彼女達は第五次聖杯戦争の参加者だったのだから、『新たな参加者』と違って名前を知られていても不思議はない。

「……そんな、会った事がないなどと。

敵として戦った事もありますが、密室で身体を重ねた仲ではない

ですか」

まったく無視して話を戻す褐色の少女。

びきっ、と赤い少女のこめかみに青筋が浮いた。

「……今のどういう意味？　アーチャー」

「――誤解するな、マスター。もう一度言うが、私は彼女に会った事がない」

主の怒りに回りくどく言う余裕がなくなったのか、赤い弓兵は憮然としながら、褐色の少女の言葉をはっきり否定する。

「初めて会った女の子が、いきなり『責任取って！』て迫って来てるって言いたいワケ？」

「……いや、『責任とって！』は言ってないだろう。

それに、そもそもそんな事実はない、と私は言っているのだ」

褐色の少女は赤い主従を不思議そうに見ている。

己の発言が敵の信頼関係に亀裂を入れた事は、意識していないらしい。

「私はともかく、あの二人から遠坂凛に乗り換えたのですか、アーチャー？

敵になった者に言う事ではありませんが、あまりフラフラとし過ぎるのもどうかと――」

「……『あの二人』？　アーチャー――」

「だから違う！　私には何の事だか分らん！
ええい、ほら凛、彼女は敵マスターだぞ？
私達を動揺させて、間隙をつく作戦に違いない！」

秒単位で悪化する己の立場に耐えかね、声を大きくする赤い弓兵。

彼のマスターは疑わしげな視線を従者に向けながら、褐色の少女に向き直る。

「……アーチャーの事はひとまず置いておくとして。
わたしは貴女を知らないけど、貴女はわたしを知っているようね」

「私を知らない？　遠坂凛、霊子虚構世界（セラフ）での戦いをお忘れなのですか？
私と貴方の戦いの間に、あの二人のどちらかが割り込んで来た事も――？」

更に不思議そうな顔をする褐色の少女。赤い少女の顔が不快げに歪む。

「悪いけど、人違いよ。わたしは貴女を知らないもの」

赤い少女は、己のサーヴァントに関しては否定していない。

赤い弓兵はものすごく文句がありそうな顔で、己のマスターを見ている。

「人違い？　しかし……いえ、きっとどちらでも良い事なのですね」
どこか納得したような表情で、褐色の少女は眼鏡をかけ直す。
「それでは改めて、初めまして遠坂凛。私はラニ＝？と言います」
「……ご丁寧にどうも。わたしの自己紹介は、必要かしら？」
「いいえ。
名前はすでに知っていますし、現在（いま）の貴方がどういった人間なのかを知る必要はありません」
褐色の少女のきっぱりとした拒絶。
赤い少女のこめかみに、更に多くの青筋が浮き出る。
「……そうね。これから殺し合いをする相手の事を知ったって、心の贅肉ですものね。
それで、貴女がこの聖杯戦争の参加者で、近頃夜を騒がせているマスターだと思っていいの？」
赤い少女は残った理性を総動員して平静を装いながら、話を本題に戻す。
「聖杯戦争の参加者、というのは合っています。
しかし、他のマスターを襲っているマスターというのは、私ではありません」

言いながら褐色の少女は、何もない地面に視線を落とす。
「つい数時間前にもここで、二組の参加者が脱落しました。襲撃者の名前はユリウス・ベルキスク・ハーウェイ。『ハーウェイの黒い蠍』と呼ばれる殺人鬼です」
赤い弓兵の貌が引き締まる。
彼にとっては、あるいは三騎士クラスのサーヴァント以上に警戒するべきかもしれない相手の名前だった。

ステータス情報が更新されました

【クラス】アーチャー
【マスター】遠坂　凛
【性別】男性
【真名】
【筋力】D　【耐久】C　【敏捷】C　【魔力】B　【幸運】E
【クラス別能力】対魔力：D　単独行動：B
【保有スキル】千里眼：C　魔術：C－　心眼（真）：B
【宝具】

interlude　褐色の少女と赤い少女（後）

「ハーウェイの黒い蠍？」

赤い少女・遠坂凛（とおさかりん）は、聞き慣れない名前に眉をひそめた。

「はい。とても危険なマスターです。
ここ数日、私は黒蠍の行動を監視していました。
すでに十人以上のマスターが、彼らの手によって倒されています」

褐色の少女・ラニ＝？は続ける。

「つまり、そのユリウスって奴が派手に動き回ってるマスターで、
貴女はそれを止めようとしてるって事？」

凛が尋ねた。赤い弓兵は黙ってラニの貌を見ている。

「違います。
私が黒蠍の行動を監視しているのは、彼が私の探し人を狙うかも
しれないからです。
それ以外で、私から彼らに何かするつもりはありません」

きっぱりと否定するラニ。

「私は『私の感情（なかみ）』、私のともだちを探しています。
黒蠍（ユリウス）は最も活発に動いているマスターですから、彼らと蠍がぶつ
かる可能性は高い」

それにユリウスはあの二人と因縁がある、と小さな声で呟くラニ。

「なるほど。
お友達を探しにわざわざ冬木市までやって来て、聖杯戦争に参加したってワケね。
なら、その友達っていうのもマスターなんだ？」

凛は呆れとも感心ともつかない声で言う。

もし探し人が一般人ならば、ユリウスと言うマスターに狙われる必要はないだろう。

「……本当に別人なのですね、遠坂凛。
ええ、私も彼らも黒蠍もマスターです。
冬木市で行われた聖杯戦争とは別の、天上世界で行われた聖杯戦争の参加者です」

ラニはどこか寂しそうな声で言う。

「私が今言える事はこれくらいです。貴方達とは、今の所戦う必要はないと思われます。
ここでの聖杯戦争は、トーナメントではないのでしょう？」

「……そうね。
冬木市の聖杯戦争はトーナメントじゃないし、貴女は暴れまわっているマスターじゃないらしいし、本来ならこのまま別れる所なのかもしれないわね」

凛はラニの言う事を認めながらも、好戦的な笑みを浮かべる。
「それでも貴女達は冬木の聖杯戦争の参加者として、戦うつもりでここにいる。
マスターとして、貴女を見逃すわけにはいかないわ」
「……それは、この場で私達と戦う、という意味ですか？」
いつの間にか、アーチャーの手に双剣が握られている。
凛の腕の魔術刻印が光を放つ。
「そうなるわね。
それに悪いけど、貴女の話をすべて鵜呑みにする事はできない。
貴女もこのまま捕まってくれそうもないし、詳しい話は貴女達を倒して聞く事にするわ」
凛の不敵な笑いに、ラニは首を横に振った。
「いいえ、アーチャーの強さはよく知っています。ですから、貴方達とは戦いません」
「……何？　ならおとなしく捕まってくれるって言うの？」
拍子抜けしたように凛は問う。
「それは違います。戦いにはならない、と言ったのです」
ラニは静かに、そしてはっきりとした声で否定する。

「攻撃するのは私達だけ。貴方達はただ、受けとめるだけです」

空気が変わる。凛とアーチャーに油断があったわけではない。

ただ、長い間冬木市に住んでいた者と、初めて訪れた時代と土地に愛着のなかった者との、認識には違いがあった――

「■■■■■■――――――！」

「バーサーカー！　コード：ゴッドフォース・クロウラー！」

「なッ！」

アーチャーが驚愕の声をあげる。狂戦士が吼え、彼の戟に魔力が流れる。

「馬鹿な、正気か！　こんな街中で奴の宝具を使うつもりか！」

「ええ。そうしなければ、貴方達は倒せない」

前回で思い知っている。

遠坂凛はマスターとして自分（ラニ）よりも戦い慣れているし、アーチャーはバーサーカーを倒した聖杯戦争の勝者だ。

故に、最初から全力で宝具を開放する。

出し惜しみしたり周囲の事に気を取られてしまえば、瞬殺されるのみだと分かっている。

「まさか！　そこまでぶっ飛んだマスターなの！」

「凛、彼女は本気だ！　目的のためなら自爆する事をも恐れない！」

すでにバーサーカーは宝具を発動する態勢に入っている。

アーチャーの双剣で、発動前に狂戦士を倒し切る事ができるか――

「万物は融解し、魂の純度はクオリアの地平に下りる――」

「――ッ！　アーチャーッッッ！」

――間に合わない！　即断した凛は己の従者に声をかける。

「チィ――！」

アーチャーは舌打ちして双剣を捨て、高速で自己の裡に埋没する。

バーサーカーの宝具は、彼の持つ中でも最硬の盾でしか防げない――！

「トゥインクゥトラ――トリス・メギストス」

ラニの声が高らかに響く。狂戦士の戟が闇夜に舞う。

「――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ

（体は剣で出来ている）・」

「■■■■■■■――――！」

アーチャーが剣の丘から盾を引きずり出す。

バーサーカーの咆哮が夜の街に響き渡る。

「主砲、放て――！」

「“熾天覆（ロー・アイアス）う七つの円環――――”！」

新都の静かな夜は、轟音と閃光に破られた――

ステータス情報が更新されました

【クラス】バーサーカー
【マスター】ラニ＝？
【性別】男性
【真名】呂布奉先
【筋力】Ａ＋　【耐久】Ａ＋　【敏捷】Ｂ＋　【魔力】Ｃ＋　【幸運】Ｃ＋
【クラス別スキル】バーサーカー化：Ｃ
【保有スキル】勇猛：Ｂ　反骨の相：Ｂ
【宝具】軍神五兵（ゴッドフォース）

interlude　赤い花と銀の紫陽花

「――本当に。時間を選ばずに人を呼び出すのね、凛」

セリフ自体は不満げだが、銀色の髪の少女の表情は特に気にしている風ではない。

時刻はすでに明け方近くになっていた。

「聖杯戦争が公の場に出ないようにするのは、教会から派遣された貴女の仕事でしょ、カレン？

文句なら、街中であんな宝具を使ったマスターに言って」

こちらははっきりと不機嫌そうに、遠坂凛（とおさかりん）は答える。

彼女らの周囲十数メートルに渡って、コンクリートの地面がクレーター状に抉れている。

付近の建物にも亀裂ができており、この場で起きた破壊の凄まじさを物語っていた。

現在、聖堂教会の人間によって、聖杯戦争で起きた破壊についての隠蔽工作が行われている。

銀髪の少女が出張ってきているのも、それが原因だった。

「まぁでも、これだけ派手にやられて、死傷者が出なかったのはラ

ッキーだったわね」

最も、褐色の少女も周りへの被害をまったく考えなかったわけではあるまい、と凛は思う。

周囲に民家はなく、深夜のため人通りも少なかった。

そして何より――

「あのラニって娘、アンタの“アイアスの盾”の事知ってたんじゃない？」

己の従者たる赤い弓兵に向けて言う。

ラニのバーサーカーの宝具“軍神五兵（ゴッドフォース）”は、対艦砲のように強力だった。

下手をすると、何百メートル・何キロメートル単位で焼け野原ができていたかもしれない。

それを防いだのは、アーチャーの投影宝具“熾天覆（ロー・アイアス）う七つの円環”だ。

「でなきゃ、あまりに都合が良すぎるものね」

今考えると、アーチャーが軍神五兵（ゴッドフォース）を防ぐ事が分かっていたからこその、宝具使用だったとも思える。

「さて、どうだろうな。

何度も言うが、私は彼女に会った事はない。

凛も別の別の人間と間違えられていたようだし、彼女の勘違いだろう」

アーチャーの返答はにべもない。

凛のサーヴァントは、あくまで我関せずを貫くつもりらしい。

「それで、バーサーカーのマスターには結局そのまま逃げられた、というわけですか……」

銀の髪の修道女カレン・オルテンシアが話を戻した。

凛は何か言い返そうとして、途中で口を噤む。

「……言い訳はできないわね。確かに、気が抜けてたのかもしれない」

第五次聖杯戦争のマスターやサーヴァント達は、『繰り返される四日間』の事などもあってほとんど全員面識がある。

良くも悪くも彼らは、冬木市の日常に馴染んでいるのだ。

心のどこかで聖杯戦争参加者が戦いに一般人を巻き込む事はあるまい、と考えてしまっていた。

その結果(ツケ)が、今回の惨状だった。

「カレン。冬木に新しく召喚されたサーヴァントは、全部で何体い

るの？」

「１２８体です。最も、ここ数日でかなり減っているようですが」

――冬木教会には、『霊器盤』と呼ばれる魔道器がある。

これは、現界したサーヴァントの数とクラスを聖杯戦争の監督役が把握するための物だ。

第三・四次監督役の言峰璃正（ことみねりせい）、第五次監督役の言峰綺礼（ことみねきれい）の手を経て、現在はカレンが預かる形になっていた。

故に彼女は、今回冬木市に現界したサーヴァントの数を把握している。

「……とんでもない数ね。

それだけのマスターがいれば、タチの悪いのも出てくるワケだ」

凛が夜の街にいる理由がソレである。

彼女にとって、魔術師が勝手に冬木の土地で争うのは無視できる事ではない。

「そうですね。教会に届けを出さないマスターばかりのようですし……」

銀のシスターも同意する。

一応表向きのルールとして、マスターは教会に参加表明をする事になっていた。

最も、このルールは聖堂教会から出されているルールであり、これまでの聖杯戦争参加者も守っていないマスターは多かったのだが――

「これからどうするつもりですか、凛？」

さして興味もなさそうに、無表情で形だけ問いかけるカレン。

彼女は凛の返答に、大体の予想がついているらしい。

「決まってるでしょ。

今回は怪我人が出なかったけど、一般人を巻き込んでいてもおかしくなかった。

冬木の土地管理者（セカンドオーナー）として、ラニや他のマスター達の事は放っとけないわ。

――貴女こそどうする気、カレン？　教会側としても、放っておけない事だと思うけど？」

問いを返す凛。彼女もカレンの答えは予想できている。

故にこれは、ただの確認。

「そうですね。今回の聖杯戦争には、新しい監督役が派遣されてい

ません。
おそらく、私が代理で監督役を務める事になると思います」
第五次聖杯戦争の監督役だった言峰綺礼は、その戦いの終盤ですでに死亡している。
冬木市の聖杯が破壊されている現在、聖堂教会はすぐに新しい監督役を派遣するほどにこの地を重要視していなかった。
そして本来、『繰り返される四日間』とその後の調査のために聖堂教会から派遣されていたカレンだが、今回の聖杯戦争では戦いの渦中にいる。

「監督役って、アンタ自身もマスターじゃない。
そんな所まで綺礼と同じにしなくていいのよ」
ただでさえキャラ被ってるのに、と続ける凛。カレンのこめかみに青筋が浮かぶ。
「……ぽるかぷったーな。私はあるがままを受け入れるだけです。
誤解は今に始まった事ではありませんが、前任者の事は関係ありません」
すさまじいスラングの後、丁寧に返答するカレン。
前任者と同じ、と言われたのがよほど癇に障ったらしい。
この二人の少女は接点がほとんどないが、第五次聖杯戦争の監督

役との縁が深く、それが非常に不本意であると思っている点で共通していた。

起床と……

瞼に浸透する朝の光で、私の意識は覚醒する。目覚めてまた、見慣れぬ天井。

知らない和室にただ一人。

「……そっか。士郎の家に泊めてもらったんだ」

いまだ働く事を拒否する頭を振るい、昨夜の記憶を辿る。

ここは衛宮士郎（えみや しろう）の本拠地であり、セイバーの傷を治すまで養生させてもらう事になっていた。

「セイバー？」

姿の見えない私の剣を呼ぶ。赤い暴君はすぐに姿を現した。

「うむ、目が覚めたようだな。おはよう、奏者よ。昨夜は良き夢を見られたか？」

セイバーが挨拶してくれる。どうやら、私が目覚めるまで霊体化していたらしい。

「おはよう、セイバー。何で霊体化していたの？」

彼女のために敷かれた布団は、人が寝ていた感じがしない。

もしかしたら一晩中起きていたのだろうか。

「ここは敵地だぞ。マスターの寝首をかきに来る、不届き者がいないとも限らんからな」

どうもそうらしい。霊体化して見張りについていたのか。

本来、私より彼女がしっかり休まなければならない筈なのだが……。

和室を後にして、廊下を歩く。セイバーはまた霊体化している。

冬の早朝は、室内にいても寒い。

と、私達が寝ていた部屋に行くらしい人影に出会った。

「あっ、おはよう士郎。昨日はありがとう」

挨拶をする。どうも私達を起こしに来てくれたようだ。

「おはよう芦家。よく眠れたか？」

返って来た挨拶にうん、と頷きで肯定する。

「そりゃ良かった。

朝飯は七時くらいになる。そこでみんなにおまえの事紹介したいんだけど、いいか？」

みんな、と言う事は複数の人間に挨拶すると言う事だ。

ここには他のマスターもいると言ってたから、その人達の事だろう。

「他のマスターって、ここには何人くらいいるの？」

頷いてから、一応聞いておく。

戦闘になった時の心構えは、早いうちからしておきたい。

「あー、マスターは二人……いや三人か？　たまに五人に増えるな。サーヴァントはセイバー以外では基本的に一人、かな」

つまり衛宮邸で戦いになった場合、士郎を含めて六人のマスターを相手取らなきゃならないって事か。

当然サーヴァントも同じ数を相手にする事になるだろう。

「それと芦家。

うちには一人一般人がいるから、魔術師や聖杯戦争の話は、その人のいない所で頼む」

士郎が少しだけ困ったように言った。

「いいけど、何で？　何か聞かれたらまずいの？」

ムーンセルには一般人がいなかったから、私にはよく分からない。

冬木市は聖杯戦争の戦場になっているのに、何故その人の前でそれらの話をしてはいけないのか。

「ああ、その人は魔術と関係がないんだ。
だから、セイバーの知り合いって事で口裏を合わせてくれると助かる」

とは言え、分からないなりに士郎の言葉に頷いておく。

多分それは、衛宮士郎にとって大切な一線なのだろうと思う事にする。

「よし、じゃあ朝飯ができたら呼ぶから居間に来ておいてくれ。
あと、道場ならあそこにあるから、鍛錬するなら使ってくれ」

言って士郎は踵を返した。

「……朝ご飯？」

そう言えば、いい匂いが廊下にまで漂っている。

ムーンセルにいた頃は、食事の事などあまり気にした事がなかったな。

士郎の気配が遠ざかると、霊体化していたセイバーが実体化した。

「……奏者よ、あやつの用意したモノを食べるのか？」

妙に警戒してセイバーが言う。

「――――？　だって用意してくれるって言うし」

「そなたは本当に警戒心がなさすぎる！　ここが敵地だと言う事が分かってない！」

セイバーが唐突に怒り出した。

同時に私も、彼女が何を警戒しているのかに思い当たる。

「心配しなくても、ご飯に一服盛るなんてマネしないよ。そんな面倒な事するくらいなら、直接私達を倒しに来るよ」

彼女が警戒しているのは、食事に毒を盛られる事だ。

彼女の生涯は血と毒杯に彩られている。

その結果サーヴァントとなった現在も、『頭痛持ち』と言うハンデを負ってしまっている。

このスキルのせいで精神スキルの成功率が低く、芸術の才能を十全に発揮する事がなかなかできないのだ。

彼女にしてみれば、敵が用意した食事を警戒するのは当然だろう。

セイバーはずっと不満を言い続けているが、私は居間に足を向ける。

せっかくの好意を無駄にしたくない。

それにこれからの事を考えると、ここで相手を見定めておく事も重要だと思うのだ。

居間には士郎の言っていた『他の住人』がいるらしく、話声が聞える。

「それじゃあ、そのまま明け方まで駆け回ってたんですか？」

「色々あってね。おかげでほとんど徹夜よ」

……？　何か、聞いた事ある声が聞えた気がした。

「今日は休日ですし、しばらく休んだほうがいいんじゃないですか？」

優しそうな声がする。どこかの保健室で支給品とか配ってそうな声だ。

「そういうワケにもいかないでしょ。
聖杯戦争が始まったんなら、これからもっと気を引き締めていかなきゃ」

勝ち気そうな声がする。どこかで巨大組織相手にテロリストとかやってそうな声だ。

「……何を馬鹿な。疲れが取れてないのかな？」

頭を振るい、わずかに湧いた期待を打ち消す。

思い描いた者達が、この場に居る事など有り得ない、と――

居間に足を踏み入れてすぐに硬直。目が捉えるのは過去の映像。

「――あら、あなたが士郎の言ってた娘？」

「芦家円（あしかまどか）さんですね？　おはようございます。昨夜はよく眠れましたか？」

居間にいたのは二人の少女。挨拶など耳に入らない。

私の意識は、赤い服の少女だけに注がれて――

「――凛ッッッ！」

声が出ると同時に駆け寄って、力一杯彼女を抱きしめていた――

初めての朝

「……別の人と間違えられたのは、本日二度目よ」

むすっとした顔で、赤い服を着た少女は言う。

こういう表情も、私の知る『彼女』に酷似していると思う。

「まぁ、芦家さんに悪気はなかったんですし」

お皿を並べながら、リボンをつけた少女が赤い少女に取りなしてくれる。

その優しさが、今は心に痛い。

（奏者よ、さっきのは余も非常に面白くない！）

私だけに聞こえる声で、セイバーが怒っている。

ただでさえ不機嫌だったのが、さらに悪化してしまったらしい。

私が初めて迎えた衛宮邸の朝は、何とも居心地の悪い空気になってしまっていた。

■

衛宮邸の居間で感動の再会を果たす筈だった私を迎えたのは、赤い少女の慌てふためく姿と、目を白黒させるリボンの少女の姿だった。

『凛！　ちゃんと地上に帰れてたんだね。会いたかった！』

と感動した私だったが、

『……姉さん、今度はまたどこで何をやらかしたんですか？』

赤い少女を見るリボンの少女の目が冷ややかになったり、

『知らないわよッ！　ちょっとアンタ、とにかく離しなさい！』

赤い少女が腕の中で必死にもがいていたり、

『凛！　そなたこそ奏者から離れよ！』

たまらず実体化したセイバーが乱入したり、

『おはようございま――何をやっているのですか、凛』

居間にやって来た士郎のセイバーが、挨拶をしようとして絶句したり、

『おはようございます。朝早くから騒がしいのですね、リン』

一緒に来ていた紫の長髪の女性がすごくクールだったりと、何とも温度差の大きい会話（ドタバタ）を経て今に至る。

最終的に台所から騒ぎを聞きつけた家主・衛宮士郎（えみやしろう）の登場によって、ようやく私の頭も冷えた。

■

「……何というか、本当にごめんなさい」

とにかく謝る。

冷静になってみると、初めて会った（と言っている）相手にいきなり抱きついてしまったのは、確かに問題だったと思う。

「あー、遠坂？

芦家も謝ってるんだし、間違って抱きついちまっただけらしいし、許してやってもいいんじゃないか？」

台所で朝ご飯の準備をしながら、士郎が取りなしてくれる。

「人違（そっち）いの方が問題あるけど。……もういいわ」

不満そうに士郎を睨んで、拗ねたように赤い少女は言った。

私はひたすら恐縮しているしかない。

「それで芦家さん、だっけ？　あなたも今回の聖杯戦争参加者って事でいいのね？」

「うん。そうだよ」

気を取り直した赤い少女の確認に答える。

あんな事してしまった後だし、答えられる分には全部答えるつもりだ。

「最近になって冬木市に大勢のサーヴァントが召喚されたのを確認してるけど、あなたのサーヴァントもそうなの？」

「……そう、だと思う」

最近になって冬木市に召喚されたサーヴァント、と言うならイエスだろう。

マスターの私も含めて、冬木市にいるのは昨夜からだ。

しかし、その前の経緯については説明しづらい。

『未来からやって来たんです』と正直に言って本気にされたら、そっちのほうが問題だと思う。

「しかし、深夜の学校で一体何をしていたんです？」

士郎のセイバーが会話に加わって来る。

私達がワケありだと言う事を察してくれたのか、士郎も彼女も、昨夜は詳しい話を聞いて来なかった。

「ここの聖杯戦争のルールが分からなかったから、情報収集してたんだ。

前に参加した聖杯戦争では、学校が舞台になってたから」

行くアテがなかったのでそこらをうろついていた、とも言う。

「前の聖杯戦争ねぇ。

この近くでそんな大掛かりな魔術の儀式をやったんなら、わたしの耳に入ってると思うんだけど」

「……ニホンでやったんじゃなかったから」

さすがに月での戦いを近くと言うのは難しいだろう。

「物騒な話の前に、朝飯にしよう。腹が減ってちゃ、話し合いもまとまらないだろ？

そういう話は、朝飯を食い終わっててからで良い」

と、士郎が話に割って入って来る。

私達が話している間に、朝ご飯の支度が終わっていたらしい。

「うわぁ」

食卓に並ぶ料理に、思わず歓声をあげてしまう。

ホカホカご飯に湯気の立ってるお味噌汁、鰤の照り焼きに卵焼きに海苔に納豆。

士郎の用意してくれた朝ご飯は、とんでもなく美味しそうだ。

唐突にムーンセルでの食生活を思い出した。

やきそばパン、カレーパン、激辛麻婆豆腐……。

「……何か、涙出て来た」

この食卓を前にしてつい、偽らざる思いを口にしてしまう。

ムーンセルにいた頃はあんまり食べ物にこだわった事なかったというか、向こうでの食生活がアレ過ぎたというか……。

特にあの神父が購買部にリクエストしたと言う麻婆なんか、辛いと言うより世知辛かった。

アレ食べた後、次の戦いで悔いなく散って逝ったマスターとかいたし。

「ああでも、桜特製弁当があったな」

保健室の少女が時々支給してくれたお弁当は、本当に美味しかった。

元になった人物が料理上手だったからだろうか？

（セイバー、すごく美味しそうだよ？　一緒に食べよう）

霊体化したままでいるセイバーに小声で言う。

お皿の数は人数より多い。士郎は彼女の事も考えてくれている。

（余はそなたが敵の用意したモノを食べる事自体に反対なのだ！
奏者（マスター）、少しでも妙な味がしたらすぐに言うのだぞ）

私のサーヴァントは、士郎の料理を食べるつもりはないらしい。

赤い少女も士郎のセイバーも紫の髪のサーヴァントも、行儀良く食卓についている。

「先輩、藤村先生とイリヤさんは、少し遅くなるそうです」

リボンの少女が士郎に何か言っている。

「そっか。なら二人には悪いけど、先に食っていよう。
藤ねえもイリヤも、そのうち来るだろ」

初めての朝食

「それじゃあ、いただきます」

手を合わせた後、料理を口に運ぶ。口の中にじゅっと、甘辛い鰤の味が広がった。

「――――！　美味しいっ！」

鰤は温かいご飯にとてもよく合っていて、どんどんお箸が進む。

油揚げのお味噌汁も絶品だ。狐耳の少女が一緒だったら、すごく喜んだに違いない。

「桜、お代わりをお願いします」

と、お茶碗を差し出す士郎のセイバー。

私はまだ半分も食べ終えてないのに、早くもお碗を空にしていた。

「はい。たくさん食べてくださいね」

ご飯をよそっているリボンの少女は間桐桜（まとうさくら）。

この少女も赤い少女『遠坂凛（とおさかりん）』と同じく、私の記憶にある。

記憶にある『間桐桜』は、ムーンセルの聖杯戦争の運営用に作ら

れたＡＩ（仮想人格）だった。

多分目の前にいるこの少女が、月海原（つくみはら）学園の保健室にいた『間桐桜』の元になった人物なのだろう。

間桐桜はご飯を山盛りにして、士郎のセイバーに手渡している。

金髪の少女はこくこく頷きながらペースを落とさず食べているが、二杯目なのにあんな量を食べきれるのだろうか？

「芦家のセイバーは、本当に朝飯食わないのか？」

衛宮（えみや）士郎（しろう）が尋ねて来る。

さきほどから随分勧めてくれているのだが、霊体化しているセイバーは頑として首を縦に振らない。

「……せっかく用意してくれたのに、ごめん。

生前のトラウマがあるらしくて、私も強く言えないんだ」

言い訳だが、まったくデタラメなわけでもない。

マスターであっても、踏み込めない領域と言うものはあるのだ。

（奏者よ、余は少し席を外すぞ）

霊体化したまま、セイバーが唐突に言って来た。

（どうかしたの？）

私が敵の用意した食事を食べる事を随分反対していたはずなのに、どうしたんだろう？

（うむ、少しばかり確かめたい事ができてな。
そなたはこのまま食事を続けているがよい）

言ってセイバーの気配が消える。

「セイバー？」

小声で呼びかけるが、応える声はない。

霊体化したままどこかに行ってしまったのだ。

「……不用心ですね」

紫の長髪の女性が呟く。

眼鏡の奥にある寒気がするほど綺麗な瞳が、セイバーが出て行ったであろう方角を見ていた。

「本当にね。マスターもサーヴァントも、緊張感がないわね」

遠坂凛が同意している。

二人とも、セイバーが私を置いてどこかに行った事に気付いているようだ。

私の知る赤い少女は優秀なマスターだったが、この凛も見ているだけで卓越したマスターだと分かる。

士郎も私より上のマスターだが、彼女は桁が一つ二つ違いそうだ。

紫の長髪の女性はライダーと呼ばれているし、私でも感じと取れる圧倒的な存在感はサーヴァントで間違いない。

青い槍兵の姿はないし、彼女がこの凛のサーヴァントなのだろうか？

「って、あれ？」

――そう言えば、おかしいな。

てっきり間桐桜がこの家にいる『一般人』だと思っていたのだが、二人は彼女の前で平然と、マスターとかサーヴァントとかの話をしている。

「士郎、一般人って桜の事じゃなかったの？」

小声で士郎に尋ねてみる。

「いや、桜はライダーのマスターなんだ。一般人は、もうそろそろ来ると思うけど……」

士郎が言い終わる前に、ドタドタと玄関のほうから足音が近づいて来た。

「イリヤちゃん、ヒドい！
朝ご飯には間に合うように起こしてねって、お小遣いまであげてたのに～！」

「ちゃんと起こしたわよ！
なのにタイガが、『むにゃむにゃ。キミが生き残るか、わたしが食い倒れるか勝負～』とかワケの分からない寝事言って、地獄車をかけてきたのが悪いんじゃない！
おかげでもう少しで二人とも、『格安地獄巡りツアー！　ヴァルハラ温泉・無期限（しぬまで）の旅』に行っちゃう所だったんだから！」

……地獄巡りなのに天国（ヴァルハラ）とはこれ如何に。

一泊二泊ではすみそうにないが、永眠しかけたという意味か？

とてつもなくシュールな会話が聞えるが、遅くなると言っていた人達だろうか。

「みんな、おっはよ～～う！　いやぁ、寝坊しちゃったよぅ！」

「ああッ！　タイガがいつまでも起きないから、もう食べ始めちゃ

ってるじゃないッ！」

襖が開き、二人の女性が現れる。

一人はどっかで見たような、月にある学校で先生とかやってそうなお姉さん。

一人はそれこそ妖精のような、白銀の髪を持った十歳前後くらいの少女。

「おはよう。藤ねえもイリヤも、早く座れよ」

「おはようございます。藤村先生もイリヤも、今朝は遅かったんですね」

「おはようございます。藤村先生、イリヤさん。ご飯はどのくらいにしましょう？」

「おはようございます。大河、イリヤスフィール。桜、お代わりをお願いします」

「おはようございます。タイガ、イリヤスフィール。お先に頂いています」

「おはようございます」

慣れた風にみんなが挨拶しているので、私もつられて挨拶をする。

イリヤと呼ばれていた少女が、私を見て怪訝そうな顔をしている。

「……？」

間桐桜から山盛りのご飯を乗っけたお茶碗を受け取ってから、首を傾げる藤村先生。

何かおかしいのだが、何がおかしいのかが分からないといった感じだ。

「――――」

考え込みながら、まにょまにょとご飯を食べ始める藤村先生。

「……あれ？　そう言えばあなた、誰だっけ？」

きっかり一杯目のご飯を食べ終えてから、疑問（わたし）に気が付いた藤村先生。

「ああ。セイバーの知り合いで、昨日からここに下宿する事になってる芦家だ」

そして私を紹介する士郎。

……昨夜殺し合いをやらかしたのだから、士郎のセイバーと知り合いだと言えなくもない、のか？

「初めまして、芦家円（あしかまどか）と言います。
しばらくこの家に滞在させてもらいますので、よろしくお願いします」

私もできるだけ丁寧に挨拶しておく。第一印象は重要である。

「あー、そっか。セイバーちゃんのお客さんだったんだ。
それで、士郎の家に滞在すると」
ふむふむと頷く藤村先生。物分かりのいい人で助かった。
ムーンセルにいた『藤村大河（ふじむら たいが）』は色々と妙な頼み事をしてくる人で、最終的に『無差別級のヘンなもの』を呼び出した後トンズラした困った人だったから、不安だったのだが。
きっと聖杯がキャラクターの個性をヘンに強調してみて、やり過ぎたのだろう。
そっかーまた下宿かー、と藤村先生はもにゅもにゅご飯を頬張る。
二杯目を食べ終えて、お茶碗を差し出しかけた所で手が止まった。
「……？　――――。……！」
その体勢で固まっている藤村先生。
なぜか凛やライダーが、お皿を持ちあげてテーブルから離れている。
「って、またこのパターンか――ッッッ？」
がしゃあん、とテーブルをひっくり返す音と虎の咆哮が、朝の衛宮邸に響き渡った。

――訂正しよう。

ムーンセルの『藤村先生』は、あれでもあまりトラブルを起こさないように調整されてたんだな……。

interlude　赤い剣士と弓兵

「むっ！　屋敷で何かあったか？」

屋根の上で実体化しながら、セイバーは室内を見返る。

衛宮邸の居間では現在、藤村大河（ふじむら たいが）による大説教の真っ最中だった。

「……あの教員は、どこにいても変わらんな。

悲劇を喜劇に変えてしまう稀有な才能の持ち主なのかもしれぬが、それにしたって程度があろう。

そなたもそう思わぬか？」

この場にいるもう一人の役者に声をかける。

己が主を敵中に置いておくのは不安だったが、それ以上に彼女には確かめておかなければならない事があった。

「我らが直接顔を合わせるのは、初めてよな」

親しげに笑いかけるセイバー。

視線の先には、赤い外套を着たサーヴァントの背中があった。

「私はおまえのマスターとも、会った事がない筈なのだがな」

振り返らずに返すアーチャー。

セイバーは一瞬怪訝そうな表情をした後、納得したように頷く。

「ふむ、なるほどな。
そう言えば現在(いま)のそなたは、我らが召喚された聖杯とは違う聖杯に招かれた存在だったな」

月にある聖杯と冬木市にあった聖杯。

どちらも『聖杯』と呼ばれるものの、両者はまったくと言っていいほど別のモノだ。

「――とはいえ、そなたがサーヴァントとしてムーンセルの聖杯戦争で戦った事に変わりはなかろう？
『錬鉄の英霊』よ」

「……らしいな。
私としてはあまり実感が湧かないが、『記録』が残っているのならばそうなのだろうよ、『暴君』」

面倒なモノだ、と溜め息をつくアーチャー。

「それで、私に何の用だ。世間話などする仲ではなかったと思うのだが」

口に皮肉な笑みを浮かべ、アーチャーはセイバーに向き直った。

「そうつれない事を申すな。同じマスターを持った者同士ではないか」

赤いし、と笑って付け加えるセイバー。アーチャーが憮然とした表情になった。

「……私がおまえのマスターのサーヴァントだとするなら、おまえにとっては、むしろ不都合な事なのではないかね？」

「うむ、その通りだ。ある意味そなたやあのキャスターは、凛やラニ以上の難敵だな。

だが、今のそなたは他の者のサーヴァントなのであろう？

昔別れた者の事をとやかく言うほど、余は狭量ではないぞ！」

胸を張って、『どんなもんだ！』と言わんばかりのセイバー。

アーチャーは絶句して赤い暴君を見ている。

「……まぁいいだろう。それで、肝心の用件は何だ？

おまえのマスターが誰と契約しようと、現在（いま）の私には関わりのない話の筈だが」

「うむ、それだ。

我らが本格的に聖杯戦争に繰り出す前に、そなたの立ち位置を聞いておきたくてな」

言いながらセイバーは居住まいを正す。

「アーチャー。

そなたと奏者は共に戦ったかもしれぬ可能性（きろく）がある故、奏者はそなたを覚えているし、そなたも奏者を分かっていよう」

それこそが主を一旦敵の手に委ねても、確かめておかねばならな

い事柄。

「その上で問う。
我が奏者（マスター）が過去（そなた）と対峙した時、そなたは奏者の敵と味方、どちらに回る？」

「私のマスター次第だな。
彼女は成果の出ない戦いを嫌うから、今の所は積極的に敵・味方に分ける必要はないだろう」

今後はどうなるか分からんがね、と皮肉げに続けるアーチャー。

「ふむ。ならばそなたは、一応中立といった所か？」

「……おまえのマスターを知る者は、私だけではあるまい。
冬木に新しく降り立ったマスターやサーヴァントの中には、おまえ達と直接戦った者もいる。
昨夜も、ラニ＝？が新都でひと暴れしてくれた事だしな」

赤い弓兵はセイバーの問いかけに直接答えず、昨夜の戦闘の事を口にした。

「ラニだと。あの自爆娘、この地に来ておるのか？」

「凛はおまえ達の知る少女ではないが、ラニは本人だったようだ。
あの『対軍仕様の生きる城塞』の姿も確認した。
――ああ、それにユリウス・ハーウェイも来ている、と言っていたな」

「何と、あの色男(ユリウス)もか！
あやつが来ているのなら、あの恐るべき暗殺者も来ているのだな！」

強敵達の存在の発覚に、思わずセイバーの声が大きくなる。

「すでにヤツらによって、十人以上のマスターが脱落したらしい。
前回の勝者達ならば、最優先で狙われるだろうよ」

「冬木市には、もともとサーヴァント達がいたのだろう？
そやつらは、己の領土を荒らされて憤らぬのか？」

気付いていないわけではないのだろう、とセイバーは問いかける。

「仕掛けられれば戦うだろうが、傍観する連中がほとんどだろう。
もとより、我らが争い求めた聖杯ではないのだ。
脱落者は次々出ているらしいが、冬木市に死傷者が出たわけではないしな」

故に、おまえ達は勝手に殺し合ってくれればいい、と言葉の外で告げるアーチャー。

「とは言え、冬木からも戦いに乗り出す者もいるだろう。
争いが起こっているのを聞きつけて、戦いを止めるためだけに夜の町を巡回する『たわけ』とかな」

嘲るようにアーチャーは続けた。

「そなた達はどうする気だ？」

「……さて、どうなるかな。
昨夜の一件で、私のマスターも本腰を入れて参戦する気になったかもしれん。
私がラニの事を知っていると確信したようだしな」
――宝具の真名開放は、サーヴァントの真名をさらす事につながる。
故にサーヴァントが宝具を発動させるのは、必殺を誓った時である。
それなのにラニとバーサーカーは必殺の筈の宝具を中途半端な形で発動させ、そのまま逃走してしまっている。
「ラニはあれで私達を倒し切れると思っていたのではあるまい。
彼女はバーサーカーの宝具も真名も私に知られているのなら、隠す意味がないと考えたのだろう。
それが、マスターの疑惑を確信に変えた」
「あの自爆娘も余計な事をしてくれるな。
それなら、そなたは傍観者をやめて、参戦せざるを得なくなったと言うわけか？」
そんな所だ、とアーチャーは自嘲した。
「私から言うべき事はこのくらいのものだ。
おまえやおまえのマスターがどうしようと、私には関係がない。

戦いになるようなら戦い、ならないのなら会う必要もあるまい」

それが、セイバーの問いかけに対するこの赤い弓兵の答えだった。

「ふむ、なるほどな。

何とも独創性に欠ける華のない答えだったが、ともかくそなたの立ち位置は分かった。

我らもそなたの邪魔をする気はないから、あの赤い女の召使いの仕事に精を出すが良い」

そうしよう、と言うアーチャーの言葉を最後に、セイバーは踵を返した。

「――ところでセイバー。話は変わるが、オレも一つだけ聞いておきたい事がある」

霊体化する寸前の赤い暴君に、弓兵が声をかける。

一人称が変わり、視線はセイバーを離れて、屋敷の中にいる剣士の主を捉えていた。

「――あの女は、一体何者だ」

コンビニの危機

「奏者よ。あの屋敷を出たはいいが、どこに行くつもりなのだ？」

霊体化したままの状態で、セイバーが尋ねて来る。

藤村大河（ふじむら たいが）の罵詈雑言……ではなくお説教を衛宮士郎（えみや しろう）達の取り成しによって乗り切った私達は、お昼ご飯を御馳走になった後、市内探索に繰り出していた。

「とりあえずは、腹ごしらえからかな」

「――――？　昼食を食べたばかりなのに、まだ食べるのか？
戦で兵糧の確保は最重要事項だが、あまり食べ過ぎるのは美しくないぞ」

……酷い言われようである。

士郎のセイバーや四回戦の道化師（ピエロ）もビックリのフードファイターか、私は。

「私じゃなくて、セイバーのだよ。
衛宮邸にいたらセイバー、警戒して何も食べないでしょ？」

あの後帰って来てからも、セイバーは用意されていたご飯に手を付けなかったのだ。

藤村先生との攻防は熾烈を極め、一時は虎のストラップのついた竹刀を持ち出しての決闘騒ぎにまで発展しかけた。

『士郎のセイバーの知り合いだから』・『これだけ人のいる家で間違いなど起きない』・『ホームステイみたいなものだ』と屁理屈をこねまわして、何とか衛宮邸の滞在を許可してもらえた頃には、すでにお昼をまわっていた。

士郎と間桐桜が急いでお昼ご飯を用意してくれ、食べ終わる頃には藤村先生の機嫌も随分良くなっていて、私に親しげに話しかけてくれた。

――その間ずっと遠坂凛や銀髪の少女・イリヤスフィールが、私に意味深な視線を向けていたのが、妙に印象に残っている。

「……やっぱりお店とか全然分からない。士郎に案内頼めば良かったかな？」

士郎は案内をすると言ってくれたのだが、せっかく用意してくれたご飯を食べずに飲食店に案内してもらうのは、さすがに気まず過ぎて断ったのだ。

私達は現在、衛宮邸のある深山町から離れ、隣町の新都まで足を伸ばしている。

新都には見渡す限り建物がいっぱいで、どこに入っていいのか分からない。

月海原(つくみはら)学園しか知らない私にとって、初めての都会は広大過ぎた。

結局近くのコンビニに入って、セイバーのご飯とちょっとした嗜好品を買う事にした私達。

セイバーも珍しく人が大勢いる中で実体化して、商品を手に取っていた。

「お弁当とかにすれば良かったのに」

「これが良い。奏者はムーンセルで、いつもこれを食べていたからな」

大事そうにやきそばパンとカレーパンを抱えて、セイバーが笑った。

……私は特にパンが好物だったワケじゃないのだが、セイバーがいいなら多分良いのだろう。

「お会計、全部で千円になります」

営業用スマイルを浮かべた店員さんは、テキパキと籠の中身を袋に詰めている。

「コレでお願いします」

学生服のポケットから、携帯端末機を取り出す。

携帯端末機をしげしげと眺め、何故か難しい顔をする店員さん。

「すみません、お客様。お会計の方をお願いしたいですが――」

「――――？　はい、端末のクレジットでお願いします」

霊子虚構空間（セラフ）にいた頃、トレジャーハンティングの賞品として獲得した『名立たる海賊の財宝』などを売却したりしているので、まとまった額のお金を持っていた。

故に私の携帯端末機には、冬木の聖杯戦争を勝ち抜くために十分な軍資金が入っているのだ。

だと言うのに、何故か眉間に皺ができている店員さん。

「……申し訳ございませんが、当店ではこちらの機械は取り扱っておりません」

……まじまじと見つめ合う私と店員さん。

ヘビに睨まれたカエルのように、嫌な汗がつぅっとにじみ出る。

「――あの、もしかして私のクレジット、使えないんですか？」

恐る恐る確認する私。こくり、と残酷な現実を肯定してくれる店員さん。

――今明らかになる衝撃の事実！

私とセイバーは見知らぬ地で、無一文の状況だったのだ！

凍りついたように見つめ合っている私と店員さん。

何とも気まずい空気が、レジ周辺に漂っていた。

「――この時代の日本では、その携帯端末機のクレジット機能は使えませんよ」

横からかけられた穏やかな声に、凍結していた空気が解凍される。

セイバーの貌に緊張が走った。

「レオッッッ！」

とっさに後ろに飛び退いて、手に持った籠を盾にするように身構える。

セイバーが私を庇うように前に出て、声の主と対峙する。

「ええ、また会えましたね。お久しぶりです。円さん、セイバー」

目の前には決勝戦で戦った好敵手（ライバル）であるレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイと、彼の最強の従者の姿があった。

白昼夢

「――――ッッ！」

手に持った籠など盾にもならない。

今の私達にできる事は、目の前の主従による蹂躙を受け入れるだけ。

悪夢としか思えない。

目の前にいるマスターは、そもそも生きている筈なんてないのに――！

「そんなに警戒しなくても、大丈夫ですよ。

こちらに猶予期間（モラトリアム）はないようですが、聖杯戦争は夜に行われるべきでしょう？」

穏やかな笑みのまま、レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイは言った。

そこには一かけらの気負いもなく、自然と王者の余裕がにじみでている。

本当に、当時のまま。記憶の中と同じ姿で、少年王は存在していた。

「――何、で」

私は知らない場所にいる。知らないマスターに知らない舞台、そして知らない時代。

それはいい。覚えのない場所での戦いなんて、聖杯戦争なら不思議でも何でもない。

「……何でっ」

だが、目の前の人物はいてはならない異物だった。

私達の聖杯戦争では、生き残って地上に帰れるマスターはただ一人。

敗者は電脳死するのが絶対のルールだった筈だ。

ならば私が生きている以上、彼は生きていてはならない筈ではなかったか。

「ッッ、ぁ」

いや、もしかしたら私が知らなかっただけで、脱落したマスター達は電脳死などせずに地上に戻っただけだったんじゃないのか？

電脳死なんて最初からなくて、ムーンセルから強制退去させられて地上の肉体に戻っていたのだ。

「……あっ」

ああ、ならば確かめる方法なんて私にはないし、知らなかったのも無理はない。

きっとそうだ、そうに違いない。

――だってそもそも、私は地上にいた事なんてなかっ――

「――――ッッッ！　痛、ぁ」

混乱しすぎて頭痛がした。精神（こころ）の動揺に、肉体（カラダ）が反応しているのだろうか？

「奏者よ、どうした！　大丈夫か！」

「円さん？　気分がすぐれないのですか？」

私の異変に気付いたのか、慌ててセイバーが駆け寄って来た。

レオも心配そうに私を見ている。

「……大丈夫。ちょっと昨日の負けを思い出しただけ」

落ち着け、思考を切りかえろ。今肝心なのは目の前に敵マスターがいる事だ。

セイバーに笑いかけて、レオの方に向き直る。

「それで、レオ。今ここで戦う気はないって思っていいの？」

「はい、こちらにはこちらのルールがあります。

ムーンセルでも、月海原(つくみはら)学園内で戦いをしかけるマスターにはペナルティがあったでしょう？
一般人の目に触れる所で戦うと、魔術協会や聖堂教会が黙ってはいないでしょうし」

……『魔術協会』や『聖堂教会』とやらは分からないけど、多分ムーンセルの『生徒会』のようなモノなんだろう。

こちらでも聖杯戦争を運営している者達がいるのか。正直助かった。

今のセイバーにあの最強のサーヴァントと戦えるような戦闘力はないし、私も丸腰に近い。

『守り刀』や『破邪刀』といった敵を攻撃できる礼装を持って来たかったが、『そんな物騒な刃物持って街中歩いたら、警察に連れて行かれるぞ』と衛宮(えみや)士郎(しろう)に止められて、身につけていなかったのだ。

何でも、冬木市の聖杯戦争には『銃刀法違反』とか言うよく分からないルールがあるらしい。

「とりあえず外に出ませんか？　店員にも迷惑がかかりますし」

並んでコンビニを出る私達。買い物の支払いは、レオがしてくれた。

彼も私と同じ時代から来た筈だが、こちらの紙幣を持っていたの

は突っ込むべき所だろうか……。

「地上でお会いするのは初めてでしたね。思っていたより、早く会えました。

この地には１００人以上のマスターがいるそうなので、なかなか会えないかと思っていたのですが」

私達に笑いかけるレオ。

士郎から聞いた話では、この地にいるマスターは１０人程度だった筈だ。

私やレオと同じく、ムーンセルから時代を越えてこの地に来たマスター達がいるのか。

「我らに会いたかった、か。

ムーンセルでの戦いの復讐に来たと言うわけか？　王の卵よ」

挑発するようにセイバーが言う。

彼女も彼らの実力は知っている筈だが、だからといって自重する気はないらしい。

「随分な物言いですが、主に対する無礼を許すつもりはありませんよ？

『バビロンの妖婦』」

一瞬、レオの一歩後ろを歩く白騎士の目に殺気が浮かんだ。

優しげな顔の内面には、レオに対する鉄の忠誠心がある事を私は

知っている。

「……私達を気にかけるよりも、あなた達が気にするべきマスターは他にいるでしょ？

昨日も一戦やらかしたけど、完敗したばっかりなんだよ」

言い返そうとするセイバーを制止して、レオに予防線を張る。

彼らは最強の主従なのだから、狙うべき相手は私達ではなくもっと強い人にするべきだ。

「そう謙遜する必要はありませんよ。僕達はムーンセルであなた達に敗れた。

ムーンセルでの聖杯戦争を制したのは、あなた達だ」

朗らかに笑うレオの笑顔は、太陽を思わせる。

憧れる事はあっても、近づける事はない。

「今度は僕達が挑戦者と言う事ですね。

兄さんもきっと、あなた達と会いたがっていると思います」

背中に嫌な汗が流れた。あのユリウスも、この地に来ているだって？

ムーンセルにいた時より状況は悪い。

最強のマスターは、最初から私に狙いを定めてしまっている。

この上さらに、あの暗殺者にも狙われなければならないのか？

「……冬木のマスターは、私よりずっと強い。
昨日戦ったマスターなんか、あなたよりも強いかもしれないよ」
挑発して他のマスターと戦わせるしかない。士郎とあのセイバーが強いのは確かだ。
私達ではどうする事もできずにただやられるだけだが、あの二人ならばレオ達を消耗させる事も不可能ではない筈だ。
「それは楽しみです。
あなた達に勝って聖杯戦争を勝ち残っていけば、その人達とも会う事になりますね」
あっさり返される。私の浅はかな考えなど、彼にはお見通しだったのだろう。
そしてレオ自身が勝者だと言った、私達より強い士郎達を恐れてもいない。

「それでは、僕達はこれで。行きますよ、ガウェイン」
「御意」
気付けば、歩きながらかなり長い時間話していたらしい。
最強の好敵手は、私達に別れを告げた。

戦うのならば相応しい場所と時間に、と言う事か。

「またお会いしましょう、円さん。あなた達と戦えるのを楽しみにしています」

去っていく少年王と太陽の騎士を、呆然と見送る。

白昼夢は消え、後には立ち尽くす私とセイバーだけが残された。

午後のコーヒー

公園のベンチにセイバーと二人並んで座り、コンビニ袋の中身を取り出す。

パンと飲み物をセイバーに手渡して、自分用に買った缶コーヒーで冷たくなってきた手を温める。

「むぅ、何とも貧相で大ざっぱな味だな。
そなたはあちらにいた頃、これを我慢して食べていたのか？」

パンを一口かじって、不満そうにセイバーは言う。

「我慢とかは特にしてなかったかな。士郎のご飯とは最初から比べ物にならないし」

というより、ムーンセルにいた頃は味の事などほとんど気にしてなかったと思う。

栄養が補給できさえすれば何でも良かったのだ。

缶コーヒーのプルタブをあけ、中身を口に流し込む。

「うわっ、にがぁ～～。あんまり美味しくないなぁ、コレ」

初めて飲んだ嗜好品は、毒のように身体に悪そうな味だった。

「別の飲み物を買えば良かったろうに。自ら好んで毒杯を呷る事もあるまい」

「一度試してみたかったんだよ。煙草はまだ吸える年齢じゃないし」

本当の年齢は分からないが、感覚では未成年だと思っている。

月海原(つくみはら)学園にいた時は2年生だったし、１６歳か１７歳という事にしておこう。

もう一口、黒い液体を口に含む。

苦味は変わらないが、今度はちょうど良い温度と香ばしい風味を口全体で感じ取れた。

「うん、慣れるとこれも悪くない。寝ぼけた頭でも、無理やり起こされる感じかする」

カフェインが脳細胞に刺激を与え、心地良いのか気持ち悪いのかも分からない感じ。

ムーンセルにいた頃に、電気煙草を不味そうに吸う魔術師が恋しがっていたのを思い出す。

あまり美味しいとは思わないが、思考をクリアにするための役には立った。

少年王との出会いは、私達に衝撃を与えた。

衛宮邸で遠坂凛(とおさかりん)や間桐桜(まとうさくら)に会った時も衝撃を受けたが、彼女達は

私の知る少女達とは別人だった。

――あの少年は、私の名前を呼んだ。ムーンセルでの私を知っていた。

彼は間違いなく、決勝戦の相手だったレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイだった。

あの時と違う事があるとすれば、互いに肉体（カラダ）を持って大地に立っている事だけだ。

「レオは霊子（セラフ）虚構世界にいた時と印象が変わらなかったね」

――Ｓｅｒｉａｌ　Ｐｈａｎｔａｓｍ。

通称ＳＥ（セラフ）．ＲＡ．ＰＨと呼ばれるソレは、聖杯（ムーンセル・オートマトン）が創った仮想空間だ。

月の内部にあるムーンセルには、生身のままで至る事は難しい。

故に私達魔術師（ウィザード）は聖杯に至るため、基底現実から魂だけを霊子化して、虚空に浮かぶ霊子（セラフ）虚構世界に干渉（アクセス）したのだ。

「レオもカスタムアバター使ってたんだっけ？

ムーンセルでも、他のマスターと最初から空気が違ってたよね？」

ムーンセルに来たマスター達は、肉体（カラダ）を持っていない。

故に、アバターを使って霊子（セラフ）虚構世界内で活動する。

私が知る限り、ほとんどのマスターのアバターは似たような外見だった。

レオのように、ぱっと見て他のマスターと違うアバターを使っていたのは少数だ。

ついでに言うと、そういう者達は例外なく強いマスター達だったと思う。

「……変装しとくべきだったかな？　私もアバターと肉体（カラダ）の外見が同じだ」

レオが私となかなか会えないかと思ったと言ったのは、それだ。

霊子虚構世界（セラフ）でのアバターの外見と地上の肉体（カラダ）の外見は、必ずしも一致しない。

ムーンセルでの一回戦の相手など、同い年の男の子かと思ってたら八歳の子どもだった。

変装していればこの時代に来て早々、最強の敵に見つかってしまう事はなかったのにと、自分の迂闊さを呪う。

「言っても仕方あるまい。

かつて倒れた少年王が時代を越えて再び我らの前に立つ事など、想像できるほうがおかしい。

あやつの異母兄もそうだったが、何とも執念深い事よな」

セイバーに言われて、もう一人の強敵の姿を思い浮かべる。
かつて黒衣の死神は、準々決勝で敗れてもなお踏み止まって、私達の行く手を遮った。
その執念は、聖杯戦争の絶対的な筈だった『敗者はそこで消える』というルールをも、一時的に変えてしまったのだ。
今回も、レオが私達と戦う事を望んでいるならば、暗殺者（ユリウス）はきっとレオよりも先に私達を倒しに来るだろう。
最期に自分で語っていたように、生まれ変わっていたとしてもきっと、レオの影としての役割を果たすために。

「あの二人以外のマスターも、こっちに来てると思う？」
「うむ、そう考えるべきだな。
どうも我らだけ過去の世界に飛ばされたというワケではなさそうだ。
前回ムーンセルで倒れた連中も全員、こちらに来ているかもしれぬ。
……ふむ。こうなると奏者よ、あの士郎との共闘は妙手だったかもしれぬな。
あやつらは前回のムーンセルの戦いには参加しておらぬ。
我らは勝者ゆえ、すべての敗者達に狙われていると思ったほうが良い。
協力者を見つけるのも難しかろう」

セイバーは衛宮士郎（えみや しろう）との協力関係を良く思ってはいない。

私が言うから、渋々従っている状態だ。

そのセイバーでも認めざるをえないほど、レオ達の出現は緊急事態だった。

「……そう言えば、約束も果たせてないんだな」

考えないようにしていた事を考えてしまった。

準決勝を目前に控えた、夕方の屋上。私のために作られたお弁当。

また一緒にお弁当食べよう、と言ってくれた彼女達との約束。

私は結局、戻って来てと願ってくれた人のもとに、帰る事ができなかった。

「まだ、間に会うかな……」

レオやユリウスがこちらに来ているのなら、彼女達も来ているかもしれない。

また、会う事ができるのだろうか？　時を越えた、まったく知らないこの舞台で――

ある会話

「ちょっといい？　衛宮くん」

ライダーに乗り潰された自転車を修理していた衛宮士郎（えみやしろう）は、赤い服の少女の声に振り返った。

「貴方とセイバー、昨日あの円って娘のサーヴァントと戦ったのよね？」

「ああ、学校の屋上で。遠坂も芦家のサーヴァントに会っただろ？」

芦家円（あしかまどか）が遠坂凛（とおさかりん）に抱きついた時、激怒した赤いサーヴァントが姿を見せていた。

騒動が収まると再び霊体化してしまったが、凛も彼女の姿は確認している。

「あの、セイバーそっくりな奴ね。
マスターもサーヴァントもそれほど強そうじゃないけど、どうなの？」

「芦家のセイバーは、そんなに強いサーヴァントじゃない。
すぐにセイバーに斬り伏せられてた。
芦家もよく分からない魔術を使ってたけど、セイバーには効かなかった」

セイバーのサーヴァントは強力な対魔力を持つが、青い騎士王の対魔力はその中でも群を抜いている。

円だけではなく、凛のような一級の魔術師の魔術でさえ士郎のセイバーにはほとんど通用しない。

円のセイバーも対魔力を持っていたが、士郎のセイバーのソレとは比べ物にならない。

「嘘！　あの娘、魔術を使ったの？」

軽い驚きを見せる凛。士郎は意外そうに赤い少女を見る。

「驚くような事なのか？　マスターになるのは、ほとんどが魔術師じゃないか」

冬木市の聖杯戦争は、魔術師達が『ある魔法』に至るために始められた儀式だった。

一部例外はあったものの、基本的には魔術師同士の戦いだと言って良い。

円達が参加した聖杯戦争がどのようなモノだったかは想像するしかないが、聖杯戦争は『万能の願望器』を手に入れるための戦いである。

魔術師が参戦していてもおかしくはない。

「だってあの娘、ほとんど一般人と変わらないじゃない。
士郎が一人前の立派（マトモ）な魔術師に見えるレベルよ、アレ」

「……でも、魔術使ってたぞ。

セイバーが一瞬でかき消したから、どんな魔術か分からなかったけど」

師匠の何気ない言葉にかなり傷つきながら答える弟子。

弟子の傷心には気付かずに、師匠は話を続ける。

「って事は、葛木先生みたいに、一般人がマスターになったってワケじゃないのか。

慎二みたいに、魔術師になれなかった魔術師かな。

令呪は確認したの？」

――令呪（コマンドスペル）は、マスターの証とされる。

サーヴァントは英霊の映し身であり、本来は人間ごときが従わせられる存在ではない。

そのために、マスターには三画の令呪が与えられる。

マスターは身体のどこかに令呪を宿し、それを以ってサーヴァントを律するのだ。

三画の絶対命令権は、時に強力な拘束としてサーヴァントの行動を制限し、時に強力な補助としてサーヴァントの行動をサポートする。

「いや、確認はしてない。

けど赤いセイバーは嫌々従ってる感じじゃなかったし、芦家があいつのマスターなのは、間違いないと思う」

基本的に令呪のないマスターにサーヴァントを縛る力はないが、令呪を身に宿さないマスターもいる。

冬木の第五次聖杯戦争でも、キャスターのマスターだった朽ちた殺人鬼は、その身に令呪を持たなかった。

柳洞寺にいる神代の魔女には、マスターからの令呪による縛りはない。

それでも彼らはマスターとサーヴァントだった。

令呪以外の絆で、彼らは結びついていた。

赤いセイバーもまた、仮に令呪がなかったとしても円のサーヴァントなのだろう、と士郎は思う。

「それで、衛宮くんは素性も分からないマスターを家に連れて帰って来た、か。

士郎が行くアテがない女の子をほっとけなかったっていうのは、今更言ってもしかたないわね。

いつもの事だし。

……けどあの娘、仮にもマスターだって言ってるのに、あっさり貴方を信用してついて来たって言うの？」

納得のいかない素振りを見せながら言う凛。

「む？

だってこっちに来たばかりで勝手が分からないんだから、他のマ

スターと協力くらいするだろ」

「初めて会ったマスターと？　それもさっきまで殺し合いをしてた敵なのに？

そんなマスター、いたら頭がどうかしてるわよ」

暗に『連れて来たアンタも大概どうかしてるけどね』と含みを持たせて言う凛。

それを感じ取って憮然とした表情になる士郎。

「芦家は、悪い奴じゃないと思う」

「……根拠は、士郎？

昨日は、彼女達の方から斬りかかって来たって聞いたんだけど？」

凛が話を聞いている限り、芦家円はサーヴァントに話し合おうとした士郎達を襲わせたマスターだ。

彼女が昨夜遭遇した、ラニ＝？に近いマスターであるという印象を受ける。

「根拠ってほどのモノはない。

と言うかただの想像なんだけど、芦家は戦いたがってるっていうより、自分は戦ってないとおかしいんだって思い込んじまってる感じだ。

少ししか話してないけど、半年前のバゼットと似てるかもしれない」

――バゼット・フラガ・マクレミッツ。

逆月の主は、一年前の第五次聖杯戦争参加者になる筈だったが、本格的に始まる前に自身のサーヴァントを奪われ、脱落していた。

その事を思い出さないようにして、彼女は『繰り返される四日間』の中で夜の聖杯戦争を続けていた。

「つまり、都合の悪い事を思い出さないように、目を背けてるって事？」

「ちょっと違う。

何て言うか、『自分の知ってる』自分と『現在（いま）の』自分が繋がってない感じだ。

整理整頓されてないとおかしいのに、色々余分なモノが詰め込まれてるような……。

ちょうど遠坂の旅行鞄みたいに」

「……面白い事言うわね、衛宮くん。何？　もしかして喧嘩売ってる？」

満面の笑顔で凛は尋ねる。彼らの周囲だけ空気が変わった。

「――悪い、言い方がマズかった。

その、上手く言えないけど、芦家は聖杯戦争の勝者だって言ってるのに、ソレっぽくないって言うか……。

話を聞くと、芦家が勝ち残ったっていう聖杯戦争も殺伐してるのに、あいつは殺し合いをしてきたようには見えない」

話している士郎自身にも、自分が芦家円に感じた違和感の正体がつかめない。

それらしい言い方をするとすれば、現実感がないマスターと言うべきか。

「ま、ボンヤリした娘だったしね。

――とりあえず、士郎が衛宮邸にあの娘を置いておくのは、賛成かな。

素性の分からないマスターは、目の届く所に置いておきたいし」

溜め息をついて凛は話をまとめた。

芦家円の事は、これからの行動を見て判断するべきだろう、と。

「士郎、これからもセイバーと夜の巡回を続けるの？」

円の話を打ち切り、別の話を始める凛。

「そのつもりだ。セイバーにも言ってある」

「なら気をつけなさい。

あの娘の事は知らないけど、タチの悪い新参マスターもいるみたいだから」

凛の脳裏に、褐色の少女と中華風の巨人の姿が浮かぶ。

彼女達の事を放っておく事はできない。

「あ、徹夜になったって言ってたの、そのせいか？」

「まぁね。アーチャーのヤツも様子が変だし、わたしもしばらくは帰りが遅くなるかな」

ある会話（後書き）

期間が空いてしまって申し訳ないです。

夜の巡回

地上の冬の夜は、私が想像していたよりも暖かい。

昨日は特に気にも留めてなかったが、冬と言えば吹き荒ぶブリザードをイメージしていた。

「士郎、冬木市に雪は降らないの？」

傍らを歩く衛宮士郎（えみや しろう）に尋ねてみた。

地上の雪は見た事がないが、冬に降ってくる綺麗なモノだというのは知っている。

「降らないって事はないぞ。けど、冬木の冬は結構暖かいんだ」

ならば、他の所なら雪を見る事もできたのだろうか。少しだけ残念な気分になる。

（奏者よ、余は寒いのは苦手だ。
雪を見るなら暖房の効いている部屋、贅をこらした最高級のロイヤルスイートという奴が良い）

霊体化しているセイバーが耳打ちして来る。

私も、そんな所でセイバーと幻想的な夜景を見たいとは思うが、あいにく現在一文無しである。

……と言うか彼女が寒いのが苦手なのは、男装と言い張っている

割に露出の多い服装のせいなんじゃなかろうか。

■

「私達も一緒に巡回に行ってもいい？」

昨日と同じように巡回に出かけようとする士郎と彼のサーヴァントを呼びとめて、私は言った。

「ちょっ、待てマスター！

確かにこやつらとの同盟を認めざるを得ぬとは言ったが、行動まで共にするとは言ってないぞ！」

セイバーがあわてて実体化して止めて来る。

彼女はどうしても士郎達が気に入らないらしい。

「芦家。夜にはタチの悪いマスターも出るって聞くし、止めといたほうがいい。

ここならライダーがいるし、屋敷の結界もあるから安全だと思う。

第一、女の子達が夜出歩いて、何かあったら困るだろ？」

靴を履きながら士郎も言ってきた。

――ずっと気になっているのだが、彼は私を聖杯戦争参加者とし

て見てない節があるように思う。

「……待て、そこの赤毛。貴様、今余を『女の子』と言いおったのか？」

不意に、私を制止しようと頑張っていたセイバーの動きが止まり、ぎろりと士郎を睨みつけた。

今の士郎の言葉が逆鱗に触れたらしい。

「え？　……あっ、いや、おまえが女だから侮ってるってワケじゃなくて――」

気が付いた士郎は、必死にフォローを入れようとしている。

今にも爆発して炎上しそうなセイバーを鎮めるべく言葉を探し――

「――――！　そうだ、子供が出歩く時間じゃないだろ今」

――水のつもりで火事の現場にガソリンをぶっかけた。

「奏者よ！　今すぐ出陣の用意を！
余を子供扱いしおったこのたわけに思い知らせてくれる！」

士郎のトドメでバックドラフトよろしく、セイバーが爆発した。

「何でさ！」

……彼女は日頃から『男でも女でもイケる』と豪語している英霊

である。

つまり女扱いされた事ではなく、子供扱いされた事を怒っていたのに……。

■

激怒したセイバーが行くと言い出したら、神様でも止める事などできまい。

士郎は心配そうに何か言っていたが、私達も聖杯戦争の参加者だ。

協力はしても、彼に私達の行動を制限する権利はない。

結果、3人と霊体化したセイバーとで夜の街をテクテク歩いている。

「そう言えば、士郎のセイバーは霊体化しなくていいの？
サーヴァントが隣を歩いてたら、士郎がマスターだって丸分かりじゃない？」

昨日から気になっている事を青いサーヴァントに問いかけてみる。

霊子虚構世界（セラフ）にいた頃から、私は戦いの時以外でセイバーを実体化させている事が少なかった。

それは、私がマスターだと敵にバレてしまうからだけではなく、外見でセイバーの真名に気付かれる可能性もあるからだ。

聖杯戦争は情報戦。隠せるモノは隠しておきたいのがマスターだと思う。

――そういった意味でも、レオ達は特例だろう。

サーヴァントの真名すらも隠さず、如何なる敵をも真っ向から迎え撃って叩き潰してきたのだ。

「円。この巡回の目的は、好戦的なマスターを発見する事です。シロウや貴女がマスターである事がはっきり分かるほうが、戦いを仕掛けられやすい。それに実体化していた方が、いきなり襲われた時に対処しやすいでしょう」

淀みのない青い騎士の返答に、思わず感心してしまう。

私はこの巡回をアリーナ探索のような情報収集と鍛錬のためだけだと思っていたが、自身を撒き餌にして敵を釣り上げる作戦だったらしい。

考えてみれば、こちらの聖杯戦争に決まった決戦日などないのだ。自身を囮にする方法は危険が大きい筈だが、士郎のセイバーには気負いが見えない。

彼女もきっとあの『太陽の騎士』と同じく、どんな敵が相手でも勝てるという自信を持っているのだろう。

夜の坂道を登っていく。

この道は見覚えがあった。昨夜の学校に行ける道だ。

私達とのドタバタで、士郎達は昨夜この辺りをしっかり見て回る事ができなかったのだ。

「――待て。何か変だ」

士郎の声で足を止める。

彼は眉根を寄せて、坂の上にある『穂群原(ほむらはら)学園』を見つめている。

「士郎？」

「何かおかしい。この辺り、昨日とまるで空気が違う」

士郎にならって私も周囲を見回すが、私は何も感じない。

……私だってムーンセルでの聖杯戦争を勝ち抜いたマスターだ。

周囲の様子がおかしければ気付くだろう。

「それ、何かの間違いじゃな――」

――瞬間、魔力が奔り、周囲の空気が一変した。

「っ！　これ、まさか――固有結界か！」

切迫した士郎の声がする。彼のサーヴァントが瞬時に臨戦態勢に入ったのが分かる。

――知っている。この固有結界を知っている。

かつて天上世界で見た、あの少女達の遊び場――

「奏者よ！　ヤツらだ！」

実体化したセイバーが叫ぶ。彼女は今、脳裏に私と同じ風景を描いている。

対戦相手にとって、恐るべき処刑場だったあの場所――

「『名無しの森』っ！」

――穏やかな一時（にちじょう）は終わり、再び夜の聖杯戦争の舞台の幕が上がる――

夜の巡回（後書き）

あけましておめでとうございます。
また期間があいてしまってすみません。
今年もよろしくお願いします。

小さなささくれ

――固有結界『名無しの森』。

私達が前回の聖杯戦争の三回戦で戦ったサーヴァントが使った物だ。

穂群原学園全体を覆うソレは、二人の少女のためだけにある『不思議の国』あるいは『鏡の国』だった。

「士郎、コレに自分の名前を書いて！」

メモ張から一枚破って衛宮士郎（えみや しろう）に渡す。

昼間のレオとの再開は衝撃的だったが、おかげで心の準備ができた。

この結界の主と戦う事も想定していた。

徒手空拳で挑めば勝機などないが、弱点が分かっていれば前回のように対策がうてるのだ。

「名前？　どういう事だ？」

「何も知らずにあの中を歩くと、存在を消されるよ」

メモ張にペンを走らせながら答える。

「貴女達はこの固有結界を知っているのですか？」

「うむ。かつての戦いで経験したモノだ」

セイバーもすでに臨戦態勢だ。

容姿や性格で油断しそうになるが、あの少女のスキル(サーヴァント)は凶悪すぎる。

「固有結界の中に入ったら、メモに書いた自分の名前を声に出して言って。

あの固有結界は、それで破る事ができる」

あのサーヴァントは、ステータスだけなら決して高くない。

スキルをどうにかできれば、現在(いま)のセイバーでも十分勝ち目がある。

何より、今は士郎達がいる。

青いセイバーと一緒ならきっと、どんなサーヴァントにも勝てるだろう。

「芦家。この固有結界を張ったマスターを知っているのか？」

「１０歳に満たない少女だよ。

彼女とまったく同じ容姿をした『キャスター』が、彼女のサーヴァントだ」

砂糖菓子の少女達。二人だけの完結した世界で遊んでいる、無邪気な子供達。

赤い弓兵が『無自覚な殺人者』と評した、無垢なる殺人鬼（イノセント・マーダー）達だった。

「あの娘は、自分が聖杯戦争で殺し合いをしてるっていう自覚がない。

寂しいから、自分を見つける事のできる人と遊びたいだけなんだ」

故に、付け入る隙は十分ある。

スキルが強力でも、あの少女は戦闘向きのマスターではない。

「そっか。なら、芦家なら説得できそうだな」

――士郎の言葉に、私はペンを止めた。

彼は今、何を言った？

「……何を言ってるの？」

よく分からない。きっと私の聞き間違いだろう。

「そのマスター、別に好きで戦ってるんじゃないんだろ？

１０歳くらいの女の子が、殺し合いに巻き込まれるなんていいワケない。

よく分かってないで聖杯戦争に参加したんなら尚更だ。

芦家の知り合いなら、おまえが言えば、戦いを止めさせられるだろう？」

士郎の言ってる事が分からない。これも私の知らないルールなのだろうか？

「――説得って何？　あの娘、敵だよ？　聖杯戦争の対戦相手だよ？」

士郎達の聖杯戦争だって、聖杯を手に入れるためには他のマスターを倒してきた筈だ。

戦いを止めさせるとか説得するとか、聖杯戦争の参加者は使わない類の言葉の筈だ。

「……さっきから士郎が何を言ってるのか、さっぱり分からない。――いい。士郎が行く気ないなら、私達だけで行くから」

「え？　あっ、ちょっと待てよ！　芦家！」

強引に話を打ち切って、校舎に向かって駆けだした。

後ろで士郎が何か言っているが、足は止めない。

これ以上士郎と話をしてしまうと、私の中の何か致命的なモノが壊れる気がしたからだ。

心にモヤモヤしたモノが残っている。聖杯戦争の勝者は一人。

なのに、何だ――

「奏者よ、待て！　余を置いて行くな！」

セイバーが慌てて追って来ているようだが、振り返る精神的余裕がない。

何かから逃げるように、校舎の中に駆け込んだ。

「何なんだ」

モヤモヤする。イライラする。自分でもよく分からない感情を持て余してしまう。

――芦家なら説得できそうだな――

「何なんだよっ！」

士郎がどういう意図で言ったのかは分からない。

でも、どうでもいい筈のその一言に、何故か殺意すら芽生えた。

◇

「どうしたんだ、あいつ」

突然の芦家円（あしかまどか）の行動に面食らい、衛宮士郎は出遅れた。

すでに円と赤い剣士の姿は校庭を駆け抜け、校舎の中へ消えていた。

「シロウ。
この固有結界を張ったマスターというのは、彼女達の聖杯戦争に参加していたのでしょう？」

彼の従者は溜め息をついた。セイバーには原因に心当たりがある。

「彼女達の聖杯戦争がどういったモノだったかは推測するしかありませんが、この固有結界の主は、彼女達の敵だったのではないですか」

冬木の参加者達は『繰り返される四日間』などの影響もあって忘れ勝ちだが、本来自分達以外の主従とは敵対しているものある。

士郎のように、敵対した参加者を気遣うマスターの方が稀なのだ。

「貴方がこの固有結界の主を説得したいと思うのは正しいし、貴方らしいと思います。
でも、円は貴方をよく知らない。私達は彼女達と出会って、1日もたっていません。
そんな時に貴方が彼女達の敵を庇うとなれば、円はシロウに裏切られたと感じても不思議ではありません」

士郎の理想、『正義の味方』になる事。

昨夜円達を助けたのも、彼が信念に従って行動した結果である。

彼を知る者達にとっては納得のいく行動だが、助けられた円はどこまで信じて良いか分からなかっただろう。

その矢先に、円達の敵の味方にもなろうとしたのだ。

「でも、１０歳にもならない女の子なんだろ？
そんな子供が殺し合いに参加するのは、どう考えてもおかしい」

「そうですね。シロウならそう言うでしょう。
しかし、円達がどう感じるかは別の問題です」

円は士郎の理想の事など知らない。

ただ助けられて、今また士郎が彼女の敵を庇うのを見ただけだ。

「とにかく二人を追うぞ、セイバー」

傍らのセイバーが頷くのを確認し、士郎も校舎を目指して駆け出した。

小さなささくれ（後書き）

お待たせしてすみません。

白と黒の砂糖菓子

「――――！　固有結界が消えるっ！」

二人が校舎に入った瞬間、辺りを覆っていた魔力が急速に薄れた。

「どうやら、円達が固有結界を破ったようですね」

言いながらセイバーは周囲に気を巡らす。

結界はすでに消え、後には魔力の残滓がくすぶるのみ。

「セイバー、芦家達の居場所は分かるか？」

衛宮士郎（えみや しろう）も周囲を見回す。

視界にはただ、無人の廊下。先に入った二人の影さえ見えない。

「四階の廊下にいます。もう一体のサーヴァントと対峙しているようです。

おそらくは、さっきの固有結界の主かと」

「……急ごう。戦闘になってるなら、芦家達だけじゃ危ない」

士郎達の足は速まる。廊下を突き抜け、2階へ続く階段に向かい――

「――――！　何だ、アレ」

そこで、巨大な異物が目に入った。

「こいつ……サーヴァントか？」

異形の巨人。階段前に出現した壁。

天井を突き抜き破りそうな巨体を屈め、強大なる門番が侵入者達を待ち構えていた。

――この怪物がサーヴァントならば、学校には最初から二体のサーヴァントがいたという事か。

ならば、芦家円達（あしかまどか）はどうやって四階まで行けたと言うのか。

「……！　シロウ、退がって！」

異形の巨人の咆哮が、夜の校舎をこだました。

怪物の剛腕は暴風のごとく、壁面を抉りながらセイバーに迫る。

「セイバー！」

「離れていてください、マスター！」

叫んだ瞬間、セイバーの足は地を蹴っていた。

爆発を思わせる踏み込みで巨大な左腕を掻い潜り、怪物の懐に潜り込む。

「はあァッッッ！」

裂帛の気合と共に、大木のような胴体に不可視の剣が叩き込まれた――

◇

――そうして私は少女達に再会する。窓から月の光が差し込む校舎の四階。

昨夜セイバーと歩いた廊下の先に、鏡合わせの砂糖菓子の細工がある。

「――あり、す？」

息を呑む。記憶の通りの可憐な姿。

白黒ドレスの童女達。幻想的な夜の遊び場。

「――……」

――頭の中にノイズが走る。

奇妙な違和感。失われていく記憶。

少女達に会うのは初めてじゃないのに、まるで初めて会ったかのような――

「自分をしっかり持つのだ！　メモを！」

――誰カガ何カヲ叫ンデイル。

めもッテ何ダ？　アア、手ニ持ッテイルこれカ。

「急げっ！　そなたの名前を取り戻せ！」

――何ヲ言ッテルノカ分カラナイ。

分カラナイカラ機械ニナッテ、意味ノ無イ記号ヲ読ミ上ゲヨウ。

「『芦家　円』」

――それハ紙ニ書イテあルダケノ記号。

どこカデ聞イタ事ガあルダケノ記号。

……意味ノ無イ記号？　何ヲ言っテいる？

「――ッッッあ！　そっ、それ、わっ、わたし！」

『芦家円（ソレ）』は、私の名前じゃないか！

ただの記号だった名前に意味が戻り、『芦家円（わたし）』の意識がはっきりした。

「奏者よ、大丈夫か！」

「……セイバー？」

見ると、セイバーが私の身体を支えている。目の前で『名無しの森』が消えていく。

「あの朴念仁に腹を立てる気持ちは分かるが、余を置いて中に踏み込むなど迂闊だぞ！

今、危うく奏者は消えてしまう所だった！」

セイバーが怒っている。

……ええっと、私は衛宮士郎を振り切って、それから、どうしたんだっけ――

「あっ！　お姉ちゃんだ！」

白い砂糖菓子の少女の声がした。

私が名前を取り戻した事で、彼女達の遊び場は完全に消滅している。

「久しぶりだねっ！　お姉ちゃん！　赤いお姫様も！」

黒い砂糖菓子の少女の声がした。

『名無しの森』の中を歩いた後遺症なのか、まだ違和感がある感じがする。

「うむ、愛いヤツらよ。

倒れた後も我らを忘れなかったとは、殊勝な心がけだ。褒めてつかわすぞ。

まぁ、余と奏者は出会った者全てを魅了してしまう至高の芸術だから、忘ようとしても忘れられぬのだろうがな」

親しげに少女達に答えるセイバーだが、その眼は笑っていない。

私もようやく現状を把握した。

――士郎に対する理解できない感情。固有結界もメモも忘れるほどの衝撃。

ついさっきまで私は、士郎達から離れる事だけしか考えられなくなった。

対策を用意しておいて、その存在を忘れてしまっていたのだ。

……何てコト。

士郎に偉そうに注意しておいて今、私の方が存在を消される所だったのか！

「だが、同じ趣向とはまた芸がない。
奏者への攻撃の報いは、その身を以って思い知らせてくれよう！」

赤い剣を構えるセイバーの声で、私も思考を切り替える。

ショックも士郎達との事も一時忘れ、セイバーのマスターとして敵達（ありす）と対峙する。

「今日は大きなお友達（ジャバウォック）は、一緒じゃないの？」

戦う前に一つ、大きな懸念を口にしてみる。

――怪物『ジャバウォック』。

黒いアリスのスキルの中で、固有結界『名無しの森』と並ぶほど厄介な存在。

その戦闘力は士郎のセイバーでも危うい。

今のセイバーでは相手にすらならないだろう。

「うん。あの子（ジャバウォック）は今ね、知らないお兄ちゃんたちと遊んでるの」

「あのお兄ちゃんたちは、いらないの」

少女達の声はどこまでも無邪気だ。この答えに偽りはない。

あのお兄ちゃんとは士郎の事か。

ジャバウォックはどうやら、彼らの侵入を食い止めているらしい。

……ついている。

ジャバウォックを弱体化させる概念武装『ヴォーパルの剣』は用意できなかったが、今ならありす達を守るモノはない。

ジャバウォックが士郎達と戦ってる間に、ありす達を倒せる！

「奏者よ、指示を」

セイバーは脚に力を溜めて、私の命令を待っている。私も軽く頷いた。

「セイバー、私達の敵を――」

とその時、何故かありすが首を傾げた。

黒いアリスも同じ仕草で、私をじっと見つめている。

「……でも、ちがう」

「あなた、ほんとうにお姉ちゃん？」

突然妙な事を言われて、続きが言えなくなった。

「……何を言ってるの？」

思わず聞き返してしまう。

セイバーもフライングを咎められた短距離走者（スプリンター）のように、飛びかかる寸前で固まってしまっていた。

「お姉ちゃん。なんであたし（ありす）とおんなじじゃなくなっちゃったの？」

「なんで仲間じゃなくなっちゃったの？」

一対の砂糖菓子はどこか悲しそうに、私の肉体（カラダ）を見つめて言った。

ステータス情報が更新されました

【クラス】キャスター
【マスター】ありす
【性別】女性
【真名】
【筋力】E　【耐久】E　【敏捷】E　【魔力】E　【幸運】E
【クラス別能力】陣地作成：A

【保有スキル】変化：Ａ＋　自己改造：Ａ

【宝具】

白と黒の砂糖菓子（後書き）

期間が空いてしまってすみません。

幽鬼

「――――ッッッ！」

金糸のような髪が数本、夜の戦場に舞い落ちる。

巨人の右腕は流木の如く廊下を破壊し、ソレにとって小さすぎる獲物を削る。

「あああああッッ！」

頭部を掠めた凶器など意にも介さず、セイバーは巨人の伸びきった右腕に剣を叩き込む。

鋼のような腕を斬り落とす事こそできなかったものの、巨人の右腕の動きが明らかに鈍った。

巨人にとって廊下は狭く、小さすぎた。

四足歩行の獣のように前傾姿勢になって腕を振り回すも、壁面に遮られてセイバーを捉えきれない。

セイバーは自身の小柄な体躯と小回りを生かし、限られた空間で巨人と正面から渡り合う。

「ハァァッッ！」

巨人の攻撃を躱し、いなし、弾き。間隙をついてセイバーは巨人に肉薄する。

全身をバネにして振るわれる剣が、巨人の左脇腹を斬り上げた。

「――――ッッッ！」

苦悶の声と共に巨人の両腕が振り下ろされる。

地を蹴る脚力とスキル『魔力放出』による推進力で、セイバーは刹那に遥か後方へ跳ぶ。

豪腕は廊下を陥没させ、セイバーは１０メートルほど離れた場所に着地した。

体格差のある相手（サーヴァント）との戦闘は、セイバーには慣れたモノだ。

第五次で死闘を繰り広げた狂戦士など、その巨体から繰り出す局地災害のような破壊力でセイバーを追い詰めた。

ギリシャの大英雄とも正面から打ち合って来たセイバーである。

目の前の怪物に後れを取るつもりなどない。

セイバーと巨人の戦いは激しさを増していく。

衛宮士郎(えみや しろう)は少し離れた所に身を置き、周囲に気を巡らしていた。

サーヴァントの近接戦闘に、士郎の入っていく余地はない。

下手に手を出そうものなら、逆に己のサーヴァントの足枷になってしまう。

何より彼は騎士王に絶対の信頼を置いている。

飛び道具を使わない戦闘において、最優たるセイバーが打ち負ける相手はほとんどいない。

故に、士郎が気にかけているのはマスターの存在。巨人の操り手の不在である。

セイバーが感知したサーヴァントは四階にいる。

階段前に陣取っている怪物が門番ならば、学校にいるであろう二組のマスターは手を組んでいる可能性がある。

芦家円達(あしかまどか)は三対二の不利な状況にあるのかもしれない。

「芦家達が危ない」

遠坂凛(とおさかりん)の話では、円は魔術師(メイガス)としては士郎以下だと言う。

柳洞寺のマスターのような驚異的な戦闘力も持たない、一般人に近い存在だ。

赤い剣士がサーヴァントを止められても、円に二人のマスターを相手にできる力はない。

一刻も早くこの場を押し通り、円達に加勢しなければならない。

■

一階廊下での攻防の音は校庭にまで響き、夜の静寂を乱している。

夜の穂群原（ほむらはら）学園は、今や平和な外界から隔離された戦場になっていた。

その異界に足を踏み入れる、一つの影。

視線が校庭から校舎内を探り、四階廊下で止まる。軽く頷くと、影は跳躍した。

重力が逆方向（ベクトル）に働いたかのように、影は天に向かって堕ちて行く

――

◇

――同(おな)ジジャナクナッタ？　仲間(なかま)ジャナクナッタ？

「何、を」

言っているのか……は、分かっている。

霊子(セラフ)虚構世界で始めて会った時から、彼女は何故か私と遊びたがっていた。

理由は簡単。私達が同じ存在(モノ)だったから。

霊子(セラフ)虚構世界に迷い込んだ精神体(サイバーゴースト)。地上で死んでしまい、彷徨っていた幼い少女。

自分と同じ、肉体(カラダ)を持たない友達(モノ)を求めていた寂しがり屋な死者が、このマスターの正体だった。

だから私と遊びたがった。だから私に見つけて欲しがった。

――だって私も、もともと肉体(カラダ)がな――

「しっかりするのだ奏者(マスター)！　敵の戯言に心を乱すな！」

セイバーの叱咤で動揺しかけた心を押し殺す。

私は今、敵マスターと対峙しているのだ。

「……ありす、私は私だよ。私は聖杯によって元の肉体（カラダ）に戻ったんだ。
だからきみ達の事も覚えているし、だから聖杯戦争に参加している」
言いながら自分の言葉に違和感を感じる。何か、おかしな所が、ある、ような――
「でも、違うの。おなじだと思ってたのに。仲間だと思ってたのに！」
「もう、お姉ちゃんもいらない。あたし（ありす）はあたし（アリス）だけいればいいの！」
幼い少女達の悲痛な訴え。
何かを裏切ってしまっているかように、奇妙に居心地が悪い。
対峙したまま刃を交える事もできず、時間だけが流れて行き――
「――――っ！」
突如、私達の周囲の空気が変わった。
固有結界などのスキルの行使ではなく、突き刺さる冷気のような殺意によって。
「っ！　この感じっ！」

知っている。この心臓が凍りつくような殺気を知っている。
振り向く私の視界に映った黒い男。
「しまった！　すでに――」
防御体勢に入ろうとするも、遅すぎた。
セイバーは最後まで言いきる事ができなかった。
「っがッ！」
「セイバーッッッ！」
セイバーの身体が殴打を受けたかのようにブレた。
そのまま片膝をつき、苦しげな貌で虚空を睨む。
「っ！　アサシ――」
「きゃああぁッッッ！」
私の叫びはアリスの悲鳴に掻き消された。
黒い小さな体が地面から離れ、そのまま壁に激突した。
「えっ？　どうしたの、あたし（アリス）？」
きょとんとした顔で、少女（ありす）が呟く。

半身たる少女（アリス）は床に崩れ落ち、ぴくりとも動かない。

「……やはりあの結界を破ったのは、おまえだったか」

かつん、かつんと死神が近づいて来る。冷たい、感情のない声は以前と変わらない。

「久しぶりだな、芦家……」

ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ。

黒いコートの暗殺者は、再び私の前に立ち塞がった。

幽鬼（後書き）

また期間が空いてしまって申し訳ないです。

死と双剣と

突然の変化。ソレは前触れなく起こった。

勝敗はすでに、ほぼ決していた。

一撃必殺の威力を誇る両腕は空を切り、不可視の剣によって巨人は着実に巨体を削られていった。

荒れ狂う海のようだった豪腕の動きは鈍り、無尽蔵にも見えた体力もじきに底を尽く。

巨人と騎士王の一騎打ちは、騎士王の剣によって幕を下ろすだろう。

勢いの弱まって来た右腕が、真っすぐセイバーに向けて突き出される。

「はッ！」

セイバーは地を蹴り、そのまま右腕を踏み台にして巨人の肩口まで駆け上がる。

「これで、終わりだ！」

見えない刃が振り下ろされ、大木のような首を断ちにいき――！

「なっ！」

振り下ろした剣が空を斬り、セイバーの身体が空中に投げ出される。

打ち果たす筈だった標的が、突如として消失したのだ。

「セイバー、これって――」

「霊体化……いえ、これは消滅したのか。

どうやら、あの巨人のマスターに何かあったようです」

駆け寄って来るマスターに答えながら、セイバーは天井を見上げる。

彼女らの何メートルか頭上の戦場で、何かが起きた。

◇

ハーウェイの殺し屋。黒い蠍。

かつての聖杯戦争で、多くのマスター達を闇打ちで葬って来た『放課後の殺人鬼』。

私が『名無しの森』を破ったせいで、この最悪の主従が校内に侵入する事を許してしまった。

「呵々々々。うむ、互いに息災で何よりだ。
おぬしらとの再会、心待ちにしておったぞ！」

呵々大笑するサーヴァントの声。

恐ろしいのは、確かに声が届いているのに、どこにいるのか分からない事だ。

「ふむ。仕留めるつもりで打ったのだが、浅かったか？
何度か死合うておる故、心構えができていたのだな」

姿無きサーヴァントは、感心しているのか面白がっているのか。

どちらにしても、圧倒的な優位にいる余裕だった。

「それにしても『剣の英霊』よ。貴様、腕が落ちたのではないか？
今の一撃を耐えきったとは言え、初めて会った時より脆く感じられるぞ」

「くっ、侮るなよ下郎。これしきの傷をつけた程度で、余を制したつもりか！」

セイバーは軽口を叩いて立ち上がろうとしているが、立ち上がる事ができていない。

意識を保ち、かろうじて片膝を立てているものの、ほとんど戦闘不能の状態だ。

「どうしたの、あたし（アリス）。眠っちゃったの？」

ありすは戸惑うように、自分の半身に声をかけている。黒い小さな身体は、動かない。

「……」

ユリウスの視線が、ありすに向けられた。

ありすはただ、呆然とアリスを見ているだけ。

「霊子（セラフ）虚構世界で見た顔。リストにある名前だ」

――いけない！　アリスが戦闘不能な今、ありすには身を守る術がない。

「お姉ちゃん」

「……何の真似だ」

ユリウスの視線からありすを背中に隠すように、二人のマスターの間に立った。

「……ありすのキャスターは倒れた。ありすにはもう、マスターとして戦う力がない」

「それがどうした。まだサーヴァントは消えていないだろう。

それにサーヴァントが居なくなっても、他のマスターは障害になる。
遠坂凛(とおさかりん)やラニ＝？のようにな」
ユリウスは元々、反則(ルールブレイク)を犯してでも他のマスターの暗殺を実行して来たマスターだ。
しかも霊子(セラフ)虚構世界では、凛やラニの協力を得た私達に敗北している。
ありすも前回の三回戦まで残っていたマスターだ。
今の彼が、ありすを見逃す事は有り得ない。
「……おまえに協力されるのも面倒だ。
今、どれほど弱体化して見えていても、おまえの牙はレオに届く。
おまえ達は、この場で確実に仕留めなければならない」
ユリウスはゆっくりと近づいて来る。淡々とした口調にも滲み出る、決して私達を逃がさないという殺意。
「芦家。今、ここで死ね。おまえだけは、レオの元には行かせない」
あまり感情を表さないユリウスが見せた、私達への執着。はっきりしている事は一つ。
――私達は、ここで死ぬ。

すぅ、と。何も無かった空間から、中華の武人風の男が姿を現した。

血のような赤い髪に、燃えるような衣装に身を包んだ偉丈夫。

ユリウスのサーヴァント・アサシンだ。

せめて、自分を殺した者の姿を目に焼き付けて逝けという事だろうか。

アサシンが近づいて来る。

身体が震え、歯がガチガチと鳴っている。涙がボロボロと零れてくる。

……死ぬ。……きっと死ぬ。……絶対に死ぬ。

死にたくなくても、殺される。

アサシンの絶掌を受けて散って逝ったマスター達と同じように。

私も冷たい人形（ドール）のような死体になる。

「奏者よ、逃げよ！」

地に膝をつき、苦しげな息をしながら叫ぶセイバー。

アリスと私を交互に見て、今にも泣き出しそうな顔をしているありす。

「……」

震える足を一歩前に出し、ありすを背にアサシンと対峙する。

「ダメだ奏者（マスター）――！」

セイバーの悲痛な声。

涙で霞む目で勝てる筈のない暗殺者達を睨み、通用する筈のない礼装を構える。

……ここでは終わらない。……こんな所で終わってはいけない。

……このままでは終われない。

「――――だってッッッ？」

私はまだ、自分（わたし）の意志で戦ってすらいないじゃないか――――！

「――投影（トレース）、開始（オン）――」

幻聴……、だろうか？　懐かしい声を聴いた気がした。

ヒュン

瞬間。私の両耳に、風を斬るような音が届いた。

「なっ！」

ユリウスの驚愕の声。私の左右を避けるように、背後から円盤が飛来した。

ソレは緩やかな曲線を描き、アサシンという点で交差する――

「かぁッッ！」

アサシンの双拳が、飛来したソレを撃ち砕く。

――円盤ではない。ソレは高速で回転していた、二本の中華風の短剣だった。

「この剣！　『干将』・『莫耶』かっ！」

アサシンの叫び声。まさか――！

呆けていた私の右脇を、一陣の風が吹き抜けた。

「円！　退がっていてください！」

青い弾丸（セイバー）は声を置き去りに廊下を駆け抜け、魔拳士に襲い掛かる。

同時に誰かが私の肩を掴み、自分の後ろに退がらせた。

「あな、た」

視界に映ったのは、赤銅色の髪。

遠き日に見た赤い背中ではない。それでも彼と同じ、誰かを『守る』ためにある背中。

「何、で」

「怪我はないか！　芦家！」

私達を背に庇うようにユリウスと対峙した、衛宮士郎（えみや しろう）という名の少年だった。

ステータス情報が更新されました

【クラス】アサシン
【マスター】ユリウス・ベルキスク・ハーウェイ
【性別】男性
【真名】
【筋力】B　【耐久】C　【敏捷】A　【魔力】E　【幸運】E
【クラス別能力】気配遮断：－
【保有スキル】中国武術：A＋＋＋　圏境：A
【宝具】

死と双剣と（後書き）

また期間が空いてしまってすみません。

剣と拳

セイバーの雷光のような斬撃が繰り出されるより疾く、敵サーヴァントは大きく後方に跳び退いた。

地に伏す赤い暴君と黒い童女の側を駆け抜け、狭い廊下を訓練された猟犬のように、セイバーは偉丈夫を猛追していく。

開け放たれた野外とは違い、校内は閉鎖された空間である。

またたく間に退路をなくし、敵サーヴァントをマスターのすぐ前まで追い詰めていた。

「ハアァッッ！」

閃光のように迫るセイバー。後方にいるマスター諸共、叩きふせる勢いで地を駆ける。

ふ、と相手サーヴァントの顔に笑みが浮かんだ。

「――暫し、気を収めるか」

「――――ッ！　なッ」

虚を吐かれた表情で、セイバーの動きが鈍った。

距離を詰めようとした脚が止まり、鼻先に迫っていた目標の変化を凝視する。

敵の、サーヴァント特有の圧倒的な存在感が薄れていく。
周囲と同化するように、身体が透けていくのだ。
「――霊体、化？」
困惑した呟きがセイバーの口から漏れた。
敵サーヴァントは完全に姿を消し、セイバーの目の前数メートル先には、敵マスターであろう男が立っている。
それも、無防備に姿を晒したままで。
――あのサーヴァントは、己がマスターを放って逃げる気なのか――？
「たわけ！　霊体化ではないっ！」
セイバーの後方から、赤い暴君の怒声が飛んだ。
同時に、『直感』が迫る危険を察知する。
――敵サーヴァントは逃げたのではない！　攻撃の態勢に入ったのだ！
『何か』が来る。数秒後に倒れる自分のイメージ。

咄嗟にセイバーは魔力を鎧に集中させ、防御の構えを取った。

「――ぐぅッ！」

鉄を打つ鈍い音と苦痛の声。

衝撃が背中から胸部を突き抜け、セイバーの口元から鮮血が流れ落ちた。

「っあッ！　あぁあぁッッッ――！」

体勢を崩しながらも敵の位置を推測し、セイバーは背後に大きく剣を振るった。

不可視の剣は壁面を抉り、廊下に一文字の傷痕が深く刻まれた。

――敵を斬った感触はない。

セイバーの剣は、届いていない。

「呵々々々、儂の一撃をモノともせぬとは！　おぬしは神仙の知己か？

あらかじめ、我が拳が『来る』事を予期しておったな？」

姿を消したサーヴァントが大笑する。

セイバーは苦しげに息を吐き、暗い廊下を睨みつけた。

「――今のは、拳？　しかも、『気配遮断』……か？」

剣を構え直し、全感覚を研ぎ澄ませて相手の位置を探る。
廊下は狭く、限られた空間。敵を見逃す事などありえない。
「然り。そう云うおぬしの得物は、剣か槍か。徒手空拳でない事は確かなようだが。
……ふむ、なるほど。全貌が視えぬとは厄介だな。
儂と拳を交えた者は、皆このような感覚を味わっていたのか」
饒舌なのか、見えないサーヴァントは親し気に話しかけてきている。
それなのに、セイバーの視覚は相手を捉えていない。
声は届いていても、その発信場所が特定できない。
「いや、愉快愉快！
セイバーと死合うために来て、またこれほどの強敵と巡り合えるとは！
我が拳脚が貴様の鎧を砕くが早いか、貴様の刃が儂を捉えるが早いか！」
――また、あの攻撃が来る！
セイバーは防御を固め、どこから来るか分からない一撃に備える。
「暫し、戯れるとしよう！」

◇

喉は掠れている。目は霞んでいる。思考は千切れている。

言わなくてはいけない事。聞かなくてはいけない事。

たくさんあるのに、出て来ない。

目の前の背中をただただ見つめ、何で、と。それ以外の言葉が、浮かんでくれない。

何故今、彼らがここにいる？　ジャバウォックと戦ったんじゃなかったのか？

どうして今、私達の戦いに割り込んで来た？　剣を投げたであろうアーチャーは？

何で今、私を庇うようにユリウス達と戦っている？　マスターは全員、敵同士だろう？

――否、そんな事よりも。そもそも、どうして今、私は。彼らの姿を見ただけで。

一瞬前までの死の恐怖すら吹き飛んでしまうくらいに。

頭の中がグチャグチャになってしまってるんだ――

「ッ！　セイバーッ！」

衛宮士郎（えみやしろう）の声で、私の脳が、網膜の捉えていた映像を認識した。

見ると、私達とユリウスの中間あたりで、青い剣士の身体がグラついている。

セイバーやアリスと同じく、背後からアサシンの視えない拳を受けたのだ。

端整な貌が苦痛に歪む。

ダメージを無視し、士郎のセイバーは虚空に反撃の剣を振るった。

「……無理だ」

アサシンの姿も彼女の剣も、私達には視えない。

それでも、その表情と周囲に気を巡らしている様子から、彼女の攻撃が当たらなかった事は分かる。

――ユリウスのアサシンのスキル、『圏境』。

その正体は、完全な体術による気配遮断だ。

気を使い、周囲の状況を感知し、また、自らの存在を消失させる技法。

極めたものは天地と合一し、その姿を自然に透けこませる事すら可能となるという。

セイバーとアリスがアサシンの接近に気付けなかったのも、このスキルのせいだ。

士郎のセイバーは何らかのスキルでアサシンの不意打ちに対処したようだが、ほとんどの場合、出会い頭の一撃で勝負はついてしまう。

青い騎士は不可視の一撃を受けても、ひるむ事なくアサシンと対峙している。

士郎のセイバーは、思った以上に強力なサーヴァントだ。

それでも、アサシンは相手が悪い。

凛の『光の御子（ランサー）』やラニの『三国志最強の武将（バーサーカー）』のような強力なサーヴァントの力を以てさえ、正攻法でユリウスの『魔拳士（アサシン）』を破る事は難しい。

「『圏境』を破らない限り……」

士郎のセイバーも、遠からず地に伏す結果に終わるだろう。

「……霊子虚構世界では見なかった顔だ。冬木市側のマスターか？」

冷たい、刃物のような声が、廊下の向こう側からかけられる。

ユリウスの視線は冷たく鋭く、自身を阻んだ士郎を射抜いていた。

「ああ。そうだ」

ユリウスの眼光を真正面から受けとめて、士郎は返した。

私とありすを背に、ユリウスの殺気から守っているかのように。

「ここでも味方を手に入れたのか、芦家」

ユリウスが私に声をかけてくる。

どんな感情がこめられているのか、私には窺い知る事はできない。

だが、彼の霊子虚構世界での敗北の大きな原因の一つに、私に味方してくれた少女達の存在がある。

ならば、ユリウスが私に協力してくれる士郎を許す筈もなく――

「……遠坂凛やラニ＝？と合流される前に。協力者諸共、この場で始末する」

――ただ、排除すべき障害として認識した。

ユリウスの右手が士郎のセイバーに向けられ、姿の視えないアサシンに命令が下る。

「――仕留めろ、アサシン」

声と同時に響く打撃音。

苦悶の呻きと共に、再び士郎のセイバーの身体がグラついた――

剣と拳（後書き）

長い間お待たせしてすみませんでした。

視えない剣と視えない拳

「っっあぐッ！」

重い衝撃が鎧の上から、セイバーの身体を突き抜ける。

膝を折りそうになるのをこらえ、セイバーは大きく剣を振るった。

不可視の剣が壁面を抉るも、暗殺者の身体を捉えない。

アサシンの打撃はセイバーを削り、セイバーの反撃はアサシンを掠める事すらない。

「くはははははっ！　我が拳を三度(みたび)受けてなお、闘志萎えずに向かって来るか！

さすがに最優たる『剣の英霊(セイバー)』、竜虎の如き兵(つわもの)よ！

これは、一撃必殺の看板も降ろさねばならぬな！」

心底愉快そうにアサシンは笑う。

反撃の動作・斬撃の爪痕から、セイバーの武器が剣である事を見抜いていた。

臓腑を抉る苦痛を噛み殺して、セイバーは深く剣を握り直す。

（通常、いくら暗殺者(アサシン)の『気配遮断』でも、攻撃態勢に入ると気配を感じ取れるものなのに……）

このアサシンからは、攻撃を繰り出す瞬間の殺気すら、感じ取れ

ない。

すでに三撃、セイバーはアサシンの攻撃をただ受けている。

（一撃一撃が重い。しかも、予期しない方角から来る）

想定外の方角から来る攻撃は、肉体的にも精神的にも、通常より深いダメージを残す。

予知直感で致命打だけは避けているが、セイバーが一方的に拳打を浴びている事に変わりはない。

いかに最優たるセイバーであっても、いずれ受け切れなくなるだろう。

（状況は私に不利だ。けれど――）

一見、セイバーはやられているだけに見える。

だが、戦闘（やりとり）の中で、セイバーは敵の戦力を量っていた。

（決して最悪ではない！）

姿の見えないアサシンの攻撃に対して、セイバーが選んだのは、あえて『一撃』を受ける戦法である。

彼女の『直感』を以ってしても、アサシンの所在地は特定できない。

ならば、彼の敵の一撃を受ける。

予め来ると分かっているならば、攻撃に耐える事もできなくはない。

（そして円のセイバーの言う通り、敵が霊体化していないのならば、私の剣も届かないわけではない！）

――体術使いとの戦闘は、第五次聖杯戦争で経験している。

魔術の手助けがあったとはいえ、その男は人間の身でありながら、肉弾戦で英霊（セイバー）に膝をつかせたのだ。

初見でアサシンの攻撃を『体術』と看破できたのも、敗北の経験による所が大きい。

（相手の武器が拳脚ならば、標的（わたし）に接近しなければ当てられない）

拳は剣よりもリーチが短い。姿が視えようが視えまいが、関係ない。

攻撃を受けた瞬間ならば、アサシンは必ず、セイバーの剣の間合いの中にいる。

「ッッッ！」

衝撃がまた、セイバーの腹部から背中を貫いた。

たまらずたたらを踏みながら、腕の力だけで剣を振るう。
反撃の剣は変わらず届かず、大きく宙空だけを斬った。
「セイバーッッ！」
「来ないで下さい、シロウッ！」
たまらず飛び出そうとした主を、セイバーは目線で制止した。
「マスターは円達を。彼女達の側には今、まともに動けるサーヴァントがいません！」
士郎は一瞬言葉に詰まった後、セイバーを見返し、軽く頷いた。
言外に、セイバーの言わんとする事を悟ったのだ。
――アサシンのクラスは本来、サーヴァントよりも、マスターにとっての天敵である。
今はセイバーが止めているが、この状況で危険なのは、むしろ衛宮士郎（みやしろう）や芦家円達（あしかまどか）マスターの方だ。
「大丈夫。私は負けません」
強い意志を目に浮かべ、セイバーは主に微笑んだ。
頼む、と短く言って、士郎は従者に背を向けた。

「ほう、サーヴァントの死合に割り込もうとするとは。
先に小娘を庇った事と言い、おぬしの主もなかなか豪胆だな。
今の時代、義侠の徒(ともがら)はいなくなったと思うていたが」

「……無駄口はいい、アサシン。早く終わらせろ」

アサシンの感心したような声と、敵マスターの冷たい声。

酔狂と合理、正反対な性格をした主従だ、とセイバーは思った。

――士郎とセイバーにとって幸運だったのは、このアサシンがセイバーとの『戦闘』を求めている事だろう。

冬木市の聖杯戦争で呼び出されるアサシンだったならば通常、真っ先に敵マスターを狙いに行く。

能力的に他のサーヴァントに劣るとされている彼らは、高い隠密能力を駆使して、背後から他の勢力の脱落を謀るのである。

このサーヴァントが隠密に徹し、マスター殺害だけを狙っていれば、おそらくセイバーにも打つ手がなかっただろう。

暗殺者(アサシン)らしくないアサシンだった。

(あるいは本来、別のクラスで呼ばれる筈だったサーヴァントなのかもしれない)

第五次聖杯戦争でも、ルールを破って召喚されたアサシンがいた。

柳洞寺に住まう魔女が門番として呼び出した、長刀使いの侍である。

彼のアサシンはただ、強い敵を求め、戦う事を欲していた。

（このアサシンも彼と同じ。シロウを狙うより先に、私と戦う事を求めている）

ならば、セイバーが斃れない限り、先にマスターがアサシンに暗殺される事はない。

◇

完全なるワンサイドゲームだった。

拳は着実に青い剣士の身体に叩き込まれ、剣は虚しく空を斬る。

勝ちに至れない戦闘。敗北するためだけの死合。

士郎のセイバーを待つのは、最後に膝を折る運命だけだ。

「芦家のサーヴァントは、立てるのか？」

倒れていたアリスを背負い、士郎が尋ねて来た。

傍らのありすは士郎と背負われたアリスと私を交互に見、戸惑っているようだ。

「たわけ！　余を侮るな下郎！
賊に少しくらい打たれた程度で、再起不能になる余ではない！」

剣を支えにして立ちあがり、昂然と胸を張るセイバー。明らかに虚勢だった。

「よし。なら下の階に移動するぞ。アサシンが相手なら、マスターの方が危ない。
ここはセイバーに任せて、俺達は怪我人を運ぼう」

言って士郎は踵を返した。戦場に背を向け、元来た道を引き返そうとする。

「でも、士郎のセイバーは――」

「俺達を庇おうとしなければ、一対一でセイバーは負けない。
一階まで降りるより先に、アサシンと決着をつけてる」

盗み見た士郎の横顔は、唇を噛みしめていた。

強く断言する言葉の端には、何かを振り切ろうとする意思がある。

それで、本当はサーヴァントと共に戦いたいんだと分かってしまった。

――士郎は『俺達』と言ったが、実際には私とありすの事だ。

サーヴァントが戦闘不能になった今、私達は足手纏いにしかならない。

私達の安全を優先する為に、士郎はサーヴァントと別れて、私達を守ろうとしているのだ。

「行こう、芦家」

「……分かった。おいで、ありす」

セイバーに肩を貸しながら、ありすに手を差し出す。

砂糖菓子の少女は少し躊躇った後、おずおずと私の手を握ってくれた。

「……行かせると思うのか」

冷たい声が、私を後ろから貫いた。

ユリウスの殺気は目を合わせるまでもなく、私の足を止めようとする。

「もちろん、通してもらいます」

涼やかな声が廊下を通る。見るまでもない。

青い剣士は最硬の盾となって、私達の背後を守っているのだ。

「呵々々々。大きく出たな、セイバーのサーヴァント。これは愉しみだ」

笑う声に重なる、鈍い打撃音。

後ろ髪を引かれる思いを振り切り、階段へと向かう士郎の後に続いた――

ガターのないボウリング

階段を降りる音が、夜の校舎に高く響く。

肌寒く感じるのは、気温のせいばかりではない。

右肩でセイバーを支え、左手でありすの手を引いて歩く。

段差があるのも相まって、酷くバランスが悪かった。

「代わろう、芦家」

前を進んでいた衛宮士郎が振り返り、声をかけて来た。

私が歩きにくそうにしているのを見かねたのだろう。

一旦背中からアリスを下ろして、セイバーに肩を貸そうとする。

「余はそなたの手など借りぬ！　手を貸す気なら、そちらの幼女にするがよい！」

ふらつきながらも、断固として士郎の協力を拒否するセイバー。

ありすも人見知りしているのか、何も言わずに、私の左手をぎゅっと握った。

「私なら、大丈夫だよ」

言いながら、息があがっているのを感じる。

セイバーの体重は軽いが、私も力のある方ではない。

本当はあまり大丈夫ではないが、預けられた体重と握られた小さな手、どちらも手離す事は躊躇われた。

「そうか。キツくなったら代わるから、無理せず言えよ」

気遣わしげに私にそう言って、士郎はアリスを背負い直した。

彼と知り合いである筈もない、あのままいけば、敵になっていたであろうサーヴァントを。

「……」

――ざわり、と心がざわめいた。

アリスを背負う士郎は、自然な様子で躊躇いがない。

ユリウスから私を庇ったのと同じように。

「奏者よ、どうかしたのか？」

――魚の小骨が、心の柔らかい部分に刺さる。

自分でもよく分からない、小さなささくれ。

先を行く士郎の背中を見つめながら、私の中に、小さな黒い感情が湧いてくるのを感じる。

「お姉ちゃん？」

「――え？　あっ、ゴメン。早く行こう」

二人の訝しげな声にハッとして、慌てて足を進め出す。

大丈夫だと言った舌の根も乾かない内から、とんだ失態だった。

セイバーを支え直し、ありすの手を握り直して、士郎と肩を並べようとした瞬間――

「――うわッ！」

――耳を劈く轟音と共に、校舎全体を揺らす凄まじい衝撃に襲われた。

◇

「ハァッッ――！」

裂帛の気合と共に、鋭い風斬り音が廊下の空気に伝導する。

武器を打ち合わせる音はなく、肉を裂く感触もない。

今の攻防で五度。セイバーはひたすら、打たれては空を斬る動作を繰り返している。

「呵々々。うむ、見事な套路だ！　やはり世界は広い。こうでなくてはな！」

「……愉しむな、アサシン」

愉しげなアサシンとは対照的に、敵マスターの声には苛立ちがある。

これまで標的を一撃で葬って来た暗殺者達は、倒れない敵を前に、ペースを崩しかけているのか。

（――もう間違いない）

自分のダメージとアサシンの戦力を天秤にかけ、セイバーは軽く頷いた。

（初撃に比べて、アサシンの打撃が軽くなっている）

最初にセイバーを襲った衝撃は、予測していなければ、倒れていてもおかしくはなかった。

赤い暴君と（おそらくはサーヴァントだと思われる）黒い童女は、この初撃によって沈んだのだろう。

セイバーとて咄嗟に防御体勢に入ったから良かったものの、心の準備もなく奇襲を受けていれば、一撃で倒されたかもしれない。

それほど重く、彼女の予期しない方角から来る攻撃なのだ。

（それなのに五度も攻撃してなお、私を倒し切れていない）

それはすなわち、セイバーに致命傷を与えられるほど、アサシンが深く踏み込んで来れていないためではないか。

セイバーの鞘『風王結界（インビジブル・エア）』は、光の屈折率を変化させ、刀身を視えなくする宝具である。

セイバーを相手にした者のほとんどは、この視えない剣によって、間合いが掴めない事に苦戦する。

アサシンであっても同様。

姿を消す事ができるからといって、同じく刀身の視えない剣の間合いを掴めるわけではない。

一見虚しく空振りしているだけに見えるセイバーの反撃だが、アサシンは簡単には踏み込めない。

迂闊に懐に飛び込めば、視えない刃に両断されかねない。

セイバーの不可視の剣に気付いた後、アサシンの攻撃は慎重なものになっていた。

（アサシンの力量は、大体把握できた。
シロウ達は退避し、目の前には敵サーヴァントとマスターしかいない）

仕掛け時である。

一際大きな動作で剣を振るうと、セイバーは敵マスター達に背を向けて走りだした。

「ぬっ！　どこへ行く気だ！」

答えずにセイバーは走る。

一年生の教室の前を駆け抜け、廊下の突き当たりでぴたりと止まると、反転した。

「ほう。自ら背水を敷いてきたか」

セイバーは壁を背にして廊下を睨む。

上下左右を壁に囲まれた廊下の直線の先に、ぽつんと敵マスターの姿だけが見える。

「なるほど。これで儂に背後を取られる心配は無くなったな」

アサシンの攻撃の一番の脅威は、どこから打たれるか分からない点である。

仮に遮蔽物のない校庭で戦っていれば、セイバーは三六〇度、全

方位からの攻撃を受けなければならなかっただろう。
故にまず、攻撃を受ける箇所を前面に限定する。
セイバーが壁を背にした事で、アサシンは背後に回る事ができなくなった。
「だが、同時に貴様の逃げ場も無くなったぞ。
圏境を見切ったわけでもなく、退路を断つのは自殺行為ではないか？」
「――逃げられないのは貴方だ、アサシン」
静かな宣言と共に、セイバーは自らの枷を解いた。
「風よ――」
剣を外敵の視線から守っていた『風王結界（インビジブル・エア）』が、その縛りから解放される。
圧縮されていた風が解き放たれ、黄金に輝く聖剣が姿を現していく。
剣が纏った風は逆巻き、勢いを増して、校舎をみしみしと軋ませた。
「――吼え上がれ！」

閉じ込められていた嵐は一つの方向性を得、破壊の砲弾を形成していく。

膨大な魔力が放出され、セイバーはさながら砲台と化す。

「おおうっ！　これが貴様の宝具かっ！」

姿は視えなくとも、アサシンは霊体化しているわけではない。

破壊の塊であるこの風をまともに受ければ、アサシンは致命傷を受けるだろう。

廊下は上下左右を壁に囲まれた直線の空間。しかも奥には生身であるマスターがいる。

アサシンに、逃げ場はない。

「風王鉄槌（ストライク・エア）ッッッ――！」

セイバーの剣が振り下ろされ、暴風の大槌が、アサシンを叩き潰さんと解き放たれた――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0566o/

fate/extra night

2011年10月7日14時24分発行